

# 1 . 教育地域科学部

教育地域科学部の教育目的と特徴	1 - 2
分析項目ごとの水準の判断	1 - 3
分析項目 教育の実施体制	1 - 3
分析項目 教育内容	1 - 20
分析項目 教育方法	1 - 31
分析項目 学業の成果	1 - 41
分析項目 進路・就職の状況	1 - 48
質の向上度の判断	1 - 53
別添資料	1 - 55

## 教育地域科学部の教育目的と特徴

### 1. 教育目的

#### (1) 教育活動を実施する上での基本方針

21 世紀の知識基盤社会においては、知的な課題探求能力・コミュニケーション能力・自治的能力が人々に求められる。こうした力を培う学習と活動を学校と地域において実現する実践力を持った担い手を育てることが教育地域科学部の社会的使命である。

文化創造の力の基盤となる教養教育を土台とし、教育と地域科学に関わる専門の基礎的な知識や技術を習得させると共に、実践的な力量並びに学問的な探究能力の育成を図る。

#### (2) 達成しようとする基本的な成果

教育実践研究を主軸とする教育課程改革に一層取り組む。

「特色ある大学教育支援プログラム」に基づき、地域と協働して、教師の専門的な力量を形成するための総合的共同プロジェクト（「ライフパートナー事業」「探究ネットワーク事業」「教職総合演習」など）を充実させる。

地域社会における人文・社会科学系の高等教育機関としての役割を果たす。

インターンシップ制度を取入れている地域実践科目等の地域参画型学習の教育内容を充実させる。

#### (3) 大学の基本的な目標との関連

創設の理念のうちの「人々が健やかに暮らせるための学術文化や科学・技術に関する高度な教育を実施する」こと、さらには創設の理念及び地域の特性を踏まえて「地域や国際社会にも貢献し得る人材を育成する」ことに関連している。

#### (4) 教育研究等の質の向上に関する目標との関連教育に関する目標

高い倫理観に裏打ちされた高い教養と豊かな人間性をもち高度な専門的知識を備えた創造力のある人材の育成を目指して、学部と大学院の教育の質的向上を図る に関連している。これを踏まえ、本学部では具体的に、専門職として求められる実践的な力量形成を目指して教育・研究の支援体制を整える、学校、地域との協働とネットワーク化を図る、学生が主体的に学べるための教育方法の改善に取り組む、評価を組入れた不断のカリキュラム開発・改善に取り組む、ことによって教育の質の向上を目指す。

### 2. 組織の特徴や特色

21 世紀の豊かな地域社会の構築に貢献する人間を育てるために、平成 11 年、「教育」と「地域」の諸問題を教育研究する複合的な学部として、それまでの教育学部を教育地域科学部に改組した。そこでは、一方で困難さを増している教育の現実に対して、教員養成部門において実践的な力量形成を強化する大胆な教育課程改革と組織改革を行うとともに（学校教育課程・定員 100 名）、他方で地域に関わる研究を深め、地域で活躍する専門職養成を進めるために新たに地域文化課程（定員 30 名）・地域社会課程（定員 30 名）を設置した。また改組後まもなく、「国立の教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会」の再編統合策に対して本学部は、改組の理念に基づく教授会見解を公表し、教育科学と地域科学の二本の柱とその連動によって、それぞれに「教育」と「地域」との協働を実現していく担い手としての力量を形成していくことを改めて確認しその実現に努めている。

平成 15 年度特色 G P「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト」に、地域の不登校の子どもたちを支える活動（ライフパートナー）や地域の子どものたちと一年間にわたって展開していく活動（探求ネットワーク）等のプロジェクトが採択されたことは、学校教育課程での「教育」と「地域」の協働をめざす取り組みの一端が評価されたことの証左に他ならない。

また地域社会・地域文化両課程では、これまでのコース制での利点を生かしつつも両

課程を一つに統合し、学生の授業評価が高い「地域実践研究科目」を核にした「ワークショップ型」授業の新設を中心とした改組を行うなど、学部改組の理念の一層の実現を図っている。

また、文化創造の力の基盤となる教養教育に関する体制は、文京地区（教育地域科学部・工学部）では平成 11 年両学部改組と同時に共通教育センター方式に改革され、そこで取組まれているプログラムが「より高い現代的な教養教育をめざして」として文部科学省の平成 17 年度特色 G P に採択された。

### 3. 入学者の状況

選抜方法は、一般選抜として前期日程と後期日程があり、特別選抜としてAO入試、推薦入試、帰国子女特別選抜、私費外国人留学生特別選抜がある。

平成 16 年度から平成 19 年度まで学部全体の志願者数は、375～633 名であり、したがって志願倍率は、5.47 から 3.96 の間を上下していることになる。

合格者のうち、一般入試および推薦入試の入学手続き者はほぼ定員の 1.1 倍以内に収まっている。入学者の出身都道府県では、全入学者(特別選抜による入学者を除く)のうち福井県出身者が、全体の約 9 割を占める。

#### 〔想定する関係者とその期待〕

地域や国際社会：基本方針に示したような新たな能力を求める社会の要請・期待がある。

学校関係者：学校からは、子どもを理解し、地域や子どもの多様さに対応できる芽を大学で育てること、そして教員としてこれまで以上の専門的・実践的な力量形成を求める要請がある。

企業側：コミュニケーション能力、社会人としての明確な問題意識、新しいものや考え方を理解し、取り入れる能力等の期待がある。

卒業(修了)生：長期的視野で成果を求めるような研究や実践・指導への期待を始め、学部と学校、行政、企業との密な連携・協力、さらには子どもや地域の人たちとのふれあいを深める機会をもっと増やす期待などがある。

在校生・受験生及びその家族：学部で学んだ成果を活かして主に福井県のすぐれた教員や企業人・公務員等になりたい・なって欲しいとの期待がある。

## 分析項目ごとの水準の判断

### 分析項目 教育の実施体制

#### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 1-1 基本的組織の編成

##### ( 観点到に係る状況 )

教育地域科学部は学校教育課程、地域文化課程及び地域社会課程(以下、地域 2 課程と略称)から構成される【資料 1-1-1】。

資料 1-1-1 教育地域科学部の課程・コース・サブコース表

課程・コース・サブコース		入学定員	
学校教育課程	言語教育コース	100	
	理数教育コース		
	芸術・保健体育教育コース		音楽教育サブコース
			美術教育サブコース
			保健体育サブコース
	生活科学教育コース		
	社会系教育コース		
	教育実践科学コース		
	臨床教育科学コース		
	障害児教育コース		
地域文化課程	生涯学習コース	30	
	異文化交流コース		
地域社会課程	行政社会コース	30	
	地域環境コース		

( 外部評価のための資料「教育地域科学部・大学院教育学研究科の現状」、平成 19 年 以下、「外部評価のための資料」と表記 )

年度ごとの定員に対する学生現員が学部全体・各課程ともに 1.1 倍前後であるのは、適切である【資料 1-1-2】。

資料 1-1-2 学生定員と学生現員

年度	課程	定 員					現 員					現員/定員
		1年次	2年次	3年次	4年次	計	1年次	2年次	3年次	4年次	計	
平成16年度	学校教育課程	100	100	100	100	400	110	112	108	127	457	1.14
	地域文化課程	30	30	30	30	120	31	32 (1)	35 (2)	38 (5)	136 (8)	1.13
	地域社会課程	30	30	30	30	120	30	32	32	36	130	1.08
	小 計	160	160	160	160	640	171	176 (1)	175 (2)	201 (5)	723 (8)	1.13
平成17年度	学校教育課程	100	100	100	100	400	111	110	112	122	455	1.14
	地域文化課程	30	30	30	30	120	33 (1)	31	30 (1)	45 (2)	139 (4)	1.16
	地域社会課程	30	30	30	30	120	31	28	32	33	124	1.03
	小 計	160	160	160	160	640	175 (1)	169	174 (1)	200 (2)	718 (4)	1.12
平成18年度	学校教育課程	100	100	100	100	400	110	110	110	122	452	1.13
	地域文化課程	30	30	30	30	120	32	32	30	35 (1)	129 (1)	1.08
	地域社会課程	30	30	30	30	120	32	30	28	35	125	1.04
	小 計	160	160	160	160	640	174	172	168	192 (1)	706 (1)	1.10
平成19年度	学校教育課程	100	100	100	100	400	109	110	111	117	447	1.12
	地域文化課程	30	30	30	30	120	33 (2)	32	32	33	130 (2)	1.08
	地域社会課程	30	30	30	30	120	34 (1)	31	30	32	127 (1)	1.06
	小 計	160	160	160	160	640	176 (3)	173	173	182	704 (3)	1.10

(基礎資料)

学部長を委員長とする「学部及び研究科企画委員会」によって教育目的等の達成を考慮した本学部の教員組織体制が随時検討・整備されてきており、適切である【資料 1-1-3, 別添資料 1-1: P55】。

資料 1-1-3 学部・研究科企画委員会要項

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項	
平成17年4月5日 教授会決定	
(設置)	
<b>第1条</b> 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会(以下「委員会」という。)を置く。	
(目的)	
<b>第2条</b> 委員会は、学部及び研究科の企画・運営に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。	
(1) 大学及び学部の中長期目標・中期計画及び年度計画の検討及びその運営方針に関する事項 (2) 学部及び研究科の将来構想の検討及びその運営方針に関する事項 (3) 学部の施設利用に関する事項 (4) その他学部及び大学院の企画・運営の基本に関する事項	
(組織)	
<b>第3条</b> 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。	
(1) 学部長 (2) 学部選出の評議員 3名 (3) 附属教育実践総合センター長 (4) 教員定員・組織及び人事制度に関する委員会委員長 (5) 教育地域科学部教務学生委員会委員長 (6) 教授会選出の教員 4名 (7) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員 若干名	
2 前項第7号の委員は、学部長が指名する。	
(任期)	
<b>第4条</b> 前条第1項第6号及び第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。	
2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。	
(委員長)	
<b>第5条</b> 委員会に委員長を置く。	
2 委員長は、学部長をもって充てる。	
(会議)	
<b>第6条</b> 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。	
(委員以外の者の出席)	
<b>第7条</b> 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。	
(専門委員会)	
<b>第8条</b> 委員会は、必要に応じ、専門委員会を置くことができる。	
2 専門委員会について必要な事項は、委員会が定める。	
(庶務)	
<b>第9条</b> 委員会の庶務は、教育地域科学部支援室において処理する。	

(教育学研究科内規集)

教員組織の構成及び専任教員の配置は設置基準及び本学部の教育目的を遂行するのに適合している。また、採用は公募制で教育研究にすぐれた能力のある教員を採用している。特に教職大学院設置に伴って教科教育の実務家教員の採用人事では、「企画委員会」のもとに、企画委員、専任予定者、当該講座各代表からなる「人事協議会」を構成し、通常的人事のプロセスの中に組入れるなど、全学部的な課題に対応した人事の仕組みを随時工夫している【資料 1-1-4、資料 1-1-5：P7】。

資料 1-1-4 教育地域科学部教員現員表

( )の数字は現員内の女性教員数

平成20年2月1日

講座	専門分野	教授	准教授	講師	助教	助手	計
言語教育	国語学	1					
	国文学	1					
	漢文学	1					
	書道	1					
	国語科教育	1	1				
	英語学	1					
	英米文学		1				
	英語科教育	1	1				
	小計	7	3				10
理数教育	代数学	1					
	幾何学	1					
	解析学		1				
	応用数学	1					
	数学科教育		1				
	物理学	1					
	化学	1	1			1 (1)	
	生物学	1	1			1 (1)	
	地学	1	1			1 (1)	
理科教育	1	1 (1)					
	小計	8	6 (1)			3 (3)	17 (4)
芸術・保健体育教育	器楽	2 (1)					
	声楽	1					
	音楽科教育	1					
	彫塑	1					
	構成		1				
	美術科教育	2					
	体育史						
	体育学	1	1				
	運動学	1					
保健体育科教育	2						
	小計	11 (1)	2				13 (1)
生活科学教育	電気	1					
	機械						
	情報技術	1					
	技術科教育	1		1			
	食物学		1 (1)				
	被服学	1 (1)					
	保育学		1 (1)				
家庭科教育	1 (1)	1 (1)					
	小計	5 (2)	3 (3)	1			9 (5)

( 次頁に続く )

福井大学教育地域科学部 分析項目

資料 1-1-4 ( 続き )

( ) の数字は現員内の女性教員数 平成20年2月1日

講座	専 門 分 野	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手	計
社会系教育	歴史学	2					
	地理学		1				
	法学		1				
	経済学	1					
	哲学	1					
	倫理学		1				
	社会科教育	1	1				
	小 計	5	4				9
発達科学	教育学	1					
	教育史						
	教育社会学	1					
	教育心理学	1					
	発達心理学						
	障害児教育	2 (1)					
	障害児心理	1					
	障害児病理						
	学校経営学						
	特別支援教育			1			
	幼児教育			1 (1)			
	協働研究/ ネット モデルとしての学校と 教師の力量形成	1		1			
	カリキュラム・授業改革		1 (1)				
小 計	7 (1)	2 (1)	2 (1)				11 (3)
生涯学習	作曲	1 (1)					
	音楽学		1 (1)				
	絵画		1				
	美術理論・美術史						
	生理学及び衛生学	1					
	運動学	1					
	社会教育	1					
	博物館情報学	1					
	教育心理学	1					
小 計	6 (1)	2 (1)					8 (2)
異文化交流	日本語・日本事情						
	中国語		2				
	言語学		1				
	英語学	1					
	英米文学	1	1				
	英語コミュニケーション		1				
	独語	1					
	仏語	1	1 (1)				
小 計	4	6 (1)					10 (1)
行政社会	法学		1				
	政治学	1					
	社会学	1					
	経済学		1				
	経営情報学	1					
	歴史学		1				
	家庭管理	1 (1)					
	小 計	4 (1)	3				
地域環境	地理学		1				
	住居学						
	生物学		1				
	地学	1					
	統計学			1 (1)			
	情報技術		1				
小 計	1	3	1 (1)				5 (1)
合 計		58(6)	34(7)	4(2)	0(0)	3(3)	99(18)
教育実践総合センター		2	1 (1)				
小 計		2	1 (1)				3 (1)
総 計		60(6)	35(8)	4(2)	0(0)	3(3)	102(19)

( 教育地域科学部・大学院教育学研究科の現状平成 19 年 )

資料 1-1-5 教職大学院の人事に関わる人事協議会の構成及び人事の流れについて

人事協議会の構成		
<b>教職大学院専任移籍人事(6名)</b>		
企画委	2名	専任予定者 2名 発達科学講座 2名
<b>教職大学院専任採用人事(6名)</b>		
企画委	2名	専任予定者 2名 当該講座 2名
<b>教科教育(実務家)(6名)</b>		
企画委	2名	学校教育課程委 1名 教職大学院専任予定者 1名
		当該講座 2名
人事の流れ		
<b>移籍人事</b> (審査)	<b>採用人事</b> (募集要項の作成)	<b>採用人事</b> (審査)
企画委員会	企画委員会	企画委員会
人事協議会	人事協議会	人事協議会
当該講座	当該講座	当該講座
人事協議会	企画委員会	人事協議会
企画委員会	人事委員会	企画委員会
人事委員会	教授会	人事委員会
教授会		教授会

(教育地域科学部教授会資料)

各教科2名の教科教育の人事に関し、1名は実務家教員を採用することを学部の人事方針として実施しているのは、実践的教員養成をめざす学部の教育目的に照らして適切であり、全国的にも優れている【資料1-1-6】。

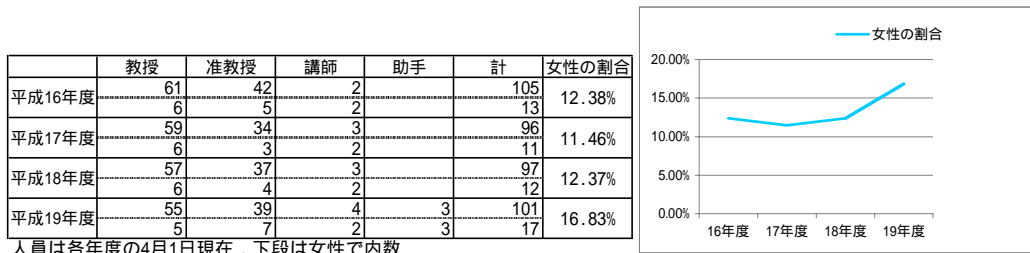
資料 1-1-6 実務家教員公募要項例

数学科教育担当教員(実務家)公募要項	
1.採用職名・人員	助教授 1名
2.教育研究分野	数学科教育をベースにした教育実践研究
3.担当科目等	(1)大学院:「数学教育特論」,「数学科教育研究」, (2)学部:「算数教材研究」,「数学科教育法」等 (3)共通教育:数学又は数学科教育に関する一般教育的科目 (4)教職大学院:専門科目を兼任で担当することもある。 「カリキュラムデザインの実践事例研究」,「授業づくりの長期実践事例研究」 等を他の教員と共同で担当する。
4.応募資格	採用予定日現在で以下の項目を満たす者 (1)数学科教育の実績があり、5年以上の実務経験がある現職教諭等で、以下の要件を満たす者 ・実務を離れている場合は、実務を離れて5年以内の者 ・学校以外での教育実践の共同研究を組織あるいは支援した経験のある者(研究主任・教務主任等を経験している者)、もしくは教育実践の共同研究に強い関心のある者 (2)大学院修士課程修了者、またはこれと同等以上の学力を有する者 (3)採用後、福井市またはその近郊に居住可能であること
*平成17年度は1名、平成19年度は6名の実務家教員を採用した。	

(平成19年度教員募集要項-抜粋)

男女共同参画を実現する取組と関わり，女性教員の比率を高め，平成20年2月1日現在では約19%にまでなっている【資料1-1-7，資料1-1-4：P5】。

資料1-1-7 女性教員の割合



人員は各年度の4月1日現在，下段は女性で内数

(基礎資料)

教員免許に必要な科目等のために学外兼務教員(非常勤講師)を採用するほか，学内教育力の活用のため学部間での講義の担当協力がコンスタントに行われるなど，学内外兼務教員の配置は適切である【資料1-1-8】。

資料1-1-8 学内・学外兼務教員数(年度別)

年度	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	合計
学外非常勤講師	59	78	85	93	315
学内非常勤講師	12	16	18	18	64
教員養成実地指導講師	51	55	53	54	213
附属教育実践センター客員教授等	7	7	7	7	28
合計	129	156	163	172	620

(基礎資料)

教養教育は「共通教育センター」によって実施され，その運用に共通教育委員会を審議機関とする全教員参加の確固たる組織を構築して，適切である【資料1-1-9，資料1-1-10：P9】。

資料1-1-9 福井大学共通教育センター規程(抜粋)

<p>福大規程第 51号 福井大学共通教育センター規程</p> <p>(設置) 第1条 本学に，福井大学共通教育センター(以下「センター」という。)を置く。</p> <p>(目的) 第2条 センターは，教育地域科学部及び工学部の共通教育を円滑に実施するとともに，共通教について調査・研究及び企画することを目的とする。</p> <p>(業務) 第3条 センターは，前条の目的を達成するために，次に掲げる業務を行う。                  (1) 共通教育に係わる教育課程の編成，実施及び改善に関すること。                  (2) 副専攻制度の実施，改善及び副専攻の認定に関すること。                  (3) 共通教育の自己点検・評価に関すること。                  (4) 共通教育の中期目標・中期計画に関すること。                  (5) 共通教育の改善に係わる事項の調査・研究及び企画に関すること。                  (6) その他共通教育の実施に関すること。</p> <p>(組織) 第4条 センターは，文京地区の全ての教授，准教授，講師，助教及び助手(以下「教員」という。)をもって組織する。 (センター長及び副センター長) 第5条 センターにセンター長及び副センター長を置き，教育地域科学部又は工学部の教授をもって充てる。                  2 センター長は，センターの業務を掌理する。                  3 副センター長は，センター長の職務を助け，センターの業務を整理する。                  4 センター長及び副センター長の任期は，2年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。                  5 センター長及び副センター長の選考に関する事項は，別に定める。</p> <p>(部会) 第6条 センターに，共通教育を円滑に実施するため，次に掲げる部会を置く。                  (1) 第1部会 大学入門セミナー部会                  (2) 第2部会 外国語部会                  (3) 第3部会 保健体育部会                  (4) 第4部会 情報処理基礎部会                  (5) 第5部会 共通教養・副専攻科目第1分野(社会)部会                  (6) 第6部会 共通教養・副専攻科目第2分野(人間)部会                  (7) 第7部会 共通教養・副専攻科目第3分野(文化)部会                  (8) 第8部会 共通教養・副専攻科目第4分野(技術)部会                  (9) 第9部会 共通教養・副専攻科目第5分野(自然)部会                  (10) 第10部会 留学生共通教育部会</p>	平成16年4月1日
--	-----------

(福井大学規程集)



資料 1-1-10 福井大学共通教育委員会要項（抜粋）

福井大学共通教育委員会要項（抜粋）

平成 16 年 4 月 1 日  
学 長 裁 定

（目的）  
第 1 この要項は、福井大学共通教育センター規程（平成 16 年福大規程第 5 1 号）第 8 条第 2 項の規定に基づき、福井大学共通教育委員会（以下「委員会」という。）について、必要な事項を定める。

（審議事項）  
第 2 委員会は、次の各号に掲げる共通教育に関する事項を審議する。  
 (1) 教育の基本理念，教育目標，教育方法等に関すること。  
 (2) 授業時間割，授業計画，履修登録等に関すること。  
 (3) 予算の配分に関すること。  
 (4) 非常勤講師の任用計画に関すること。  
 (5) 非常勤講師の選考及び任用に関すること。  
 (6) 副専攻制度の実施，改善及び副専攻の認定に関すること。  
 (7) 部会の編成に関すること。  
 (8) 自己点検・評価に関すること。  
 (9) センター-の管理運営に関すること。  
 (10) 中期目標・中期計画に関すること。  
 (11) その他委員会が必要と認めたこと。

（組織）  
第 3 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。  
 (1) センター-長  
 (2) 副センター-長  
 (3) 各部会長  
 (4) 教育地域科学部及び工学部教務学生委員会委員長  
 (5) 教育地域科学部及び工学部選出の教員 各 1 名  
 2 前項第 5 号の委員は、所属の学部長の推薦に基づき、学長が委嘱する。  
 3 前項の委員の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。（以下略）

（福井大学規程集）

観点 1-2 教育内容，教育方法の改善に取り組む体制

（ 観点に係る状況 ）

学部及び研究科カリキュラム委員会とFD委員会が連携して教育内容・方法の改善に取り組んでいる【資料 1-2-1，資料 1-2-2：P10】。  
 ・FD委員会は毎年、各コースから授業の取組についての実践報告を得て、交流・検討し合う授業実践記録検討会を実施し、これを報告書にして公表・周知している。  
 ・平成 18 年度からは、全国的にも例をみない全学的取組へと発展した【資料 1-2-3：P11】。また、FD活動及び授業改善の状況は教員の個人評価にも反映されている【資料 1-2-4：P12】。

資料 1-2-1 カリキュラム委員会要項

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科カリキュラム委員会要項

平成 17 年 4 月 5 日 教授会決定

（設置）  
第 1 条 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科カリキュラム委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（目的）  
第 2 条 委員会は、学部及び大学院のカリキュラムに関し、次の各号に掲げる事項を審議する。  
 (1) 現行カリキュラムの評価に関する事項  
 (2) カリキュラム改善に関する事項  
 (3) 教員免許課程認定に関する事項  
 (4) その他カリキュラムに関する学部長からの諮問事項

（組織）  
第 3 条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。  
 (1) 学部選出の評議員 1 名  
 (2) 教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会委員 1 名  
 (3) 教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会委員 1 名  
 (4) 教育地域科学部学校教育課程委員会委員長及び副委員長  
 (5) 教育地域科学部地域文化課程・地域社会課程委員会委員長及び副委員長  
 2 第 1 項第 2 号及び第 3 号の委員は、選出母体の委員の互選による。  
 (委員長)

第 4 条 委員会に委員長を置く。  
 2 委員長は、前条第 1 項第 1 号の委員をもって充てる。  
 (会議)

第 5 条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。  
 (委員以外の者の出席)

第 6 条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。  
 (専門委員会)

第 7 条 委員会は、必要に応じ、専門委員会を置くことができる。  
 2 専門委員会について必要な事項は、委員会が定める。  
 (庶務)

第 8 条 委員会の庶務は、学務部教務課において処理する。

（教育地域科学部内規集）

**福井大学教育地域科学部ファカルティ・ディベロップメント委員会要項**

平成16年5月7日 教授会決定

(設置)

**第1** 本学部に、本学部教員のファカルティ・ディベロップメント(教育内容及び授業方法の改善を図るための組織的な取組をいう。以下「FD」という。)を推進するため、福井大学教育地域科学部ファカルティ・ディベロップメント委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(所掌事項)

**第2** 委員会は、次に掲げる事項を審議し、その実施に当たる。

- (1) FDの企画及び実施に関すること。
- (2) FDに関する情報を収集し、本学部教員に提供すること。
- (3) FDに関する講演会及び研修会等を企画し、実施すること。
- (4) FDの自己点検・評価に関すること。
- (5) その他FDに関すること。

(組織)

**第3** 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教授会選出の教員 2名
- (2) 以下の各講座グループから各1名ずつ選出された教員 5名  
言語教育講座及び理数教育講座  
芸術・保健体育教育講座及び生活科学教育講座  
社会系教育講座及び発達科学講座(附属教育実践総合センターを含む。)  
生涯学習講座及び異文化交流講座  
行政社会講座及び地域環境講座

(任期)

**第4** 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

**第5** 委員会に、委員長を置く。

2 委員長は、委員の互選による。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(会議)

**第6** 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 学部長は、委員会に出席し、意見を述べることができる。

(委員以外の者の出席)

**第7** 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門部会)

**第8** 委員会は、必要に応じ、専門部会を置くことができる。

2 専門部会について必要な事項は、委員会が定める。

(庶務)

**第9** 委員会の庶務は、総務部人事労務課において処理する。

(教育地域科学部内規集)



資料 1-2-3 ( 続き )

F D 研究会参加者のコメント

招待講演者 溝上慎一氏 ( 京都大学高等教育研究開発推進センター ) のコメント  
 全学 F D フォーラム分科会について

福井大学には、教育地域科学部、医学部、工学部の 3 学部があるが、私が聞いた限りでは、こうした学部を越えての全学 F D フォーラムははじめてのことである。学部を越えるという部分の配慮からか、所属する教員の専門性が少しでもわかるようにするための配慮からか、分科会報告者の所属には学部名が書かれておらず、講座や学科のみが書かれていた。この点は印象深かった。直接拝聴できた分科会は第 1 分科会だけなので、他の発表は資料をざっと見ただけであるが、概ね「( 自身の ) 授業実践を語る」という分科会テーマは「学生をどのように育てようとしているか」「学生のどの部分をもっと育てなければならぬか」というように翻訳されて報告されていたようである。1 分科会の中に異なる学部の授業実践が 2 つ並べて報告されているが、あまり専門特化した知識内容にこだわりすぎず( まったくないというのも不可能であるが )、学生をどのように育てるかという観点から報告するならば、学部を越えて議論を共有することができる。事前に十分に考えられて企画された分科会であったとつくづく感じした次第である。( 平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書 P 34 より抜粋 )

F D フォーラム参加者のコメント  
 学生に考えさせるについて

報告や資料から I 先生の授業のねらいは「学生が考える」ことに力点が置かれている。これは当たり前前の命題ではあるが、実はそんなに簡単なことではないと感じているのは私だけではない。参加者からも「学生に考えさせるのは難しい」という感想も述べられていたが、私たちは学生が考えるような授業をしているのだろうか？専門知識の一方的な伝達に終止してはいないだろうか？それ以前に自分たちの専門分野で学生に「何を」「どのように」考えるのかを伝えていっているのだろうか？学生に考えさせる、この点だけでもディスカッションできれば良かったと後で思った。I 先生の授業は誰にでも起こりうるが普段は自己の問題として捉えにくい「障害」をテーマとして、簡単な体験、生の事例紹介、現場の教師の授業参加、小グループでのディスカッションと色々な方策によって学生を揺さぶり、インパクトを与えることで否応なく考えざるを得ない状況を作っている。これについては資料に受講生の評価や感想が載っているのでぜひ目を通していただきたい。私はときおり記録するの忘れて、改めて「学生に考えさせる」について考えさせられ、分科会後でも頭の片隅に残ったままである。これだけでも今回の分科会には私にとっては有意義であった。( 平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書 P 114 より抜粋 )

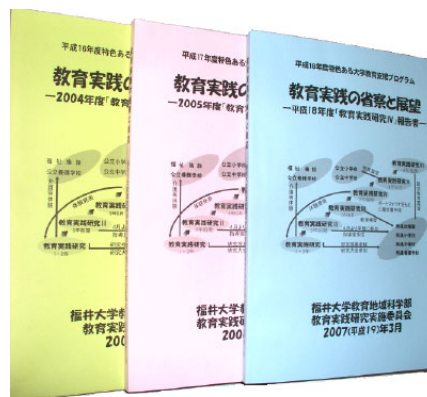
( 平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書 )

資料 1-2-4 教育活動評価基準

<p><b>A 「授業の実施状況」( 0 ~ 10 点 )</b>                  【基本】・シラバスへの記載、15 回の授業実施、成績評価表の期限内提出がなされていれば基本点 = 8、という考え方を基にし、それに加点・減点を行う。( なお、15 回の授業実施の内には試験の 1 回を含むものとする。 )</p> <p><b>基本点</b>                  1 授業ごと( 以下も基本的に同じ ) に、休講回数・補講回数が 2 以上であれば減点 1 とする。                  シラバスへの記載がなされていなければ、減点 1 とする。                  成績評価表が出されていなければ減点 1 とする。                  担当授業コマ数( 学部、大学院を含む ) については、実コマ数が年間を通じて 8 コマを下回る場合は減点 1 とする。                  キャンパス間協力での授業担当を行ってれば、加点 1 とする。                  中期計画・中期目標から抽出される授業実施関連での教育目標に大きな貢献があったと認められる場合は、加点 1 とすることができる。( 「 特記事項・その他」の欄に記載すること。 )                  卒論生又は、修論生が 1 名以上いる場合には、それぞれについて加点 1 とする。                  留学生( 学部・大学院研究生 [ 教員研修留学生を含む ]、日研究生、特別研究生、短期留学プログラム学生 ) が 1 名以上いる場合は、加点 1 とする。                  授業科目名と授業内容に不一致があると認められる場合には、総合評価で相応の減点を行うことがある。</p> <p><b>「授業の実施状況」の合計点</b></p>	<p><b>C 「F D その他の教育活動」( 0 ~ 5 点 )</b>                  【基本】・年間一度以上 F D 関係の研修会に出席し、オフィスアワーを設定していれば普通 = 3、という考え方を基にし、その上に立って加点・減点とする。</p> <p><b>基本点</b>                  年間に一度も F D 関係の研修会に出席していないものは減点 1 とする。                  助言学生がいて、助言学生との懇談会を開催していれば加点 1 とする。                  研修会( F D ) での報告者( 報告書作成が前提されている ) は加点 2 とする。                  学部及び大学院の入試試験問題作成・採点・面接委員はいずれかを担当していれば加点 1 とする。                  次に掲げる教育活動に関する委員会で、最も活動実績があったと認められる委員会一つについてのみ加点 1 とする。( 共通教育委員会、カリキュラム委員会、部 F D 委員会、学校教育課程委員会、地域文化課程・地域社会課程委員会、教育実践研究実施委員会、介護等体験実施委員会、学部就職委員会 )                  学部就職委員会委員以外の者で、学生の就職相談等に関し、特に活発な活動であると認められる場合には加点 1 とする。                  顧問など課外活動での学生指導に見るべき貢献があれば加点 1 とすることができる。                  実習、インターンシップ等にかかわる学外機関との協議・折衝を担当した場合には加点 1 とすることができる。( 「 特記事項・その他」の欄に記載すること。 )                  自主学習への配慮、基礎学力不足学生への配慮等から、特別な取組を行っている場合には、加点 1 とすることができる( 例えば自主ゼミ等の活動の促進、補習授業の開講等 )。( 「 特記事項・その他」の欄に記載すること。 )                  中期計画・中期目標から抽出される授業実施関連以外での教育目標に大きな貢献があったと認められる場合は、加点 1 とすることができる。( 自己申告は「特記事項・その他」の欄に記載すること。 )</p> <p><b>「F D その他の教育活動」の合計点</b></p>
<p><b>B 「授業の工夫・改善等」( 0 ~ 5 点 )</b></p> <p> ) 授業 ( 共同授業を含む ) の工夫・改善について、記述があれば 2 点とする。</p> <p>次の事項について該当する事項があれば、加点する。加点 3、2、1、0 の 4 段階に分ける。                  ア・1. 授業の内容・負担( 学生にとって ) の雰囲気工夫・改善                  ア・2. 授業の進め方の工夫・改善                  ア・3. 成績評価方法の工夫・改善                  イ. 授業目的の達成度からみた成果・効果                  ウ. 学生の意見のフィードバック( ないし学生評価 )                  エ. 他の教員の参考となる取組                  上記観点に照らして何れか 1 つでも特に評価できるものを、加点 3 とする。                  加点 2、1 のものは、加点 3 のものと相対比較において決める。                  ) 課程・コース・サブコース単位の活動としてのカリキュラムの工夫・改善について、カリキュラム上の改善に資する貢献が認められた場合には、関係した各人を加点 1 とすることができる。</p> <p><b>「授業の工夫・改善等」の合計点</b></p>	<p>平成 18 年 4 月 21 日、学部及び研究科教員個人評価指針が教授会にて了承される。</p> <p>平成 19 年 9 月から教員個人評価が本格実施に入る。</p> <p>( 平成 19 年度教員評価資料 )</p>

「教育実践研究」の授業では、関係機関の参加による実習の振り返りや、学生による長期の実習の振り返りレポートの作成とその検討を公開の場で行い、その成果を e-ポートフォリオシステム等の改善に活かしている【資料 1-2-5, 資料 2-1-4 : P 22, 資料 4-2-3 : P 47】。

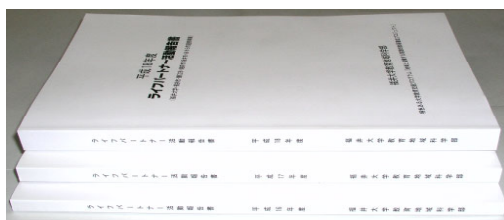
資料 1-2-5 「教育実践研究」報告書



(教育実践の省察と展望)

ライフパートナー・探求ネットワーク・教職総合演習では、複数の専門の教員が関わり、学生の取組を検討する報告会を公開で行うとともに報告書を作成し、毎年その検討を踏まえて内容・方法の改善を進めている【資料 1-2-6[1], [2], 資料 2-1-6 : P 23, 別添資料 1-3 : P 58】。具体的な改善例として、ライフパートナーでは、法人化後、不登校児ばかりでなく発達障害児にも支援活動を拡大すると共に、相談室登校をしている生徒に対してインターネットを介して授業を配信する活動を始めた【別添資料 1-2 : P 57, 資料 3-1-2 : P 32】。

資料 1-2-6[1] ライフパートナー活動報告書



(平成 16・17・18 年度ライフパートナー活動報告書)

資料 1-2-6[2] 探求ネットワーク報告書

	<p>目次</p> <p>はじめに</p> <p>第 1 章 子どもの姿から見る探求ネットワーク～活動と振り返りの流れ</p> <p>1. 「なかまつり」から見える「探求ネットワーク」の姿 ( 8 )</p> <p>2. 探求ネットワーク一年間の流れ ( 12 )</p> <p>3. 年度を越えたサイクル ( 15 )</p> <p>第 2 章 振り返りから活動を捉える</p> <p>人形劇ブロック ( 19 )</p> <p>紙すきブロック ( 57 )</p> <p>デコボコ冒険ブロック ( 91 )</p> <p>もくもくブロック ( 137 )</p> <p>歴史たんけんブロック ( 201 )</p> <p>気球ブロック ( 243 )</p> <p>ふれあいフレンドクラブ ( 295 )</p> <p>第 3 章 活動を支える組織</p> <p>1. 全体運営を支える組織</p> <p>(1) 係会活動 ( 352 )</p> <p>(2) 会議 ( 358 )</p> <p>2. 年度の組織における課題とその対処について ( 364 )</p> <p>3. 来年度の展望</p> <p>第 4 章 捉え直し積み重ねていく探求活動</p> <p>～探求ネットワーク 9 年間の歩み～ ( 379 )</p> <p>おわりに</p> <p>スタッフ紹介</p>
--	--

(探求ネットワーク報告書)

教師教育改革のための公開研究集会を年に 2 回開催し、教師教育研究者や実践者の参加を全国から得て、本学部・研究科の授業と実践の報告を行い、教師教育改革の優れた取組として高い評価を得てきている【資料 1-2-7 : P14】。そうした成果が教職大学院設置に結実した【別添資料 1-4 : P 59】。



資料 1-2-8 学部及び研究科評価委員会要項

**福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会要項**

平成17年4月5日 教授会決定

(設置)

**第1条** 教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科評価委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

**第2条** 委員会は、学部及び研究科の自己点検・評価に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 中期計画・年度計画に対応する自己点検・評価の検討・実施に関する事項
- (2) その他学部が実施する組織評価の検討・実施に関する事項
- (3) 教員の個人評価の検討・実施に関する事項
- (4) 教員の研修に関する事項

(組織)

**第3条** 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学部長
- (2) 学部選出の評議員 1名
- (3) 教授会選出の教員 4名
- (4) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員 若干名

2 前項第4号の委員は、学部長が指名する。

(任期)

**第4条** 前条第1項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

(委員長)

**第5条** 委員会に委員長を置く。

2 委員長は、第3条第1項第2号の委員をもって充てる。

(会議)

**第6条** 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(委員以外の者の出席)

**第7条** 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

**第8条** 委員会は、必要に応じ、専門委員会を置くことができる。

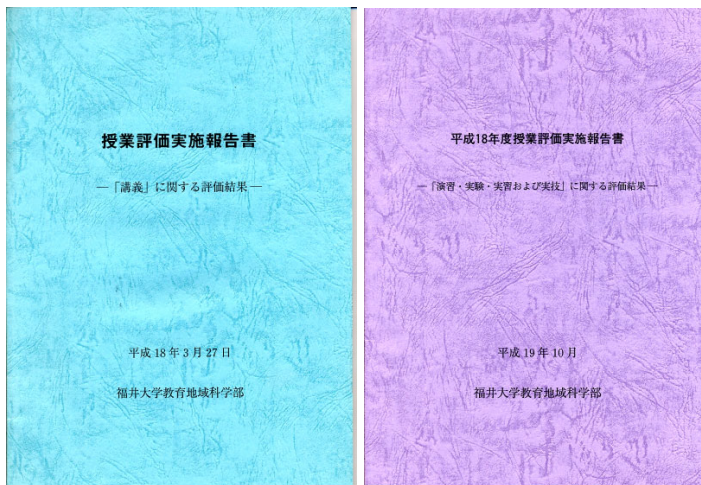
2 専門委員会について必要な事項は、委員会が定める。

(庶務)

**第9条** 委員会の庶務は、教育地域科学部支援室において処理する。

(教育地域科学部内規集)

資料 1-2-9 授業評価実施報告書



(平成17年度・18年度授業評価実施報告書)

資料 1-2-10 授業アンケート実施例

平成17年度実施 授業に関するアンケート

調査項目については、強くそう思う-全く思わない(1-5)の5件法、一部で強くそう思う-該当しない(1-6)の6件法で回答を求めた。

調査項目一覧

(受講の動機)

1. どのような目的でこの授業を受講しましたか? 受講の動機に最も近いものを1つ選んで で囲んでください。  
 a. 必修科目だから b. 単位のため c. 自分の将来に必要なだから  
 d. 内容に興味があったから e. 周囲の人が受講するから f. なんとなく

(自身の取組)

2. この授業に対して積極的に取組んだ

(授業の内容)

3. この授業の内容にはもともと興味があった。  
 4. この授業は、理解しやすくまとまっていた。  
 5. この授業で新しい考え方が修得できた。  
 6. この授業の内容は、将来役に立つだろう。

(授業の負担)

7. この授業の内容の分量は適当であった。  
 8. この授業のレポートや課題の分量は適当であった。

(授業の雰囲気)

9. この授業の雰囲気はよかった。  
 10. 何時でも質問できる雰囲気があった。

(先生の授業の進め方)

11. 先生は授業の準備を十分にしていた。  
 12. 単調にならないように進め方に工夫がみられた。  
 13. 説明、解説が分かりやすかった。  
 14. 学生の質問に明快な回答を与えてくれた。  
 15. 学生からの反応や意見を生かした授業をしていた。  
 16. 板書は見やすく、ノートが取りやすかった。  
 17. 教科書(テキスト、配付資料を含む)の内容は適当であった。  
 18. スライド、OHP、ビデオなどの教材の使い方が効果的であった。

(従業内容と評価)

19. 授業内容についての説明(ガイダンスあるいはシラバス)に沿った授業が行われた。  
 20. 提出した課題に対して、適切なフィードバックがあった。  
 21. 成績評価方法の説明が明確になされた。

(総合評価)

22. この授業は全体としてよい授業であった。  
 (自由記述欄)

	強く そう 思う	そう 思う	いえ ない ど ちら も	そう 思 わ な い	全 く 思 わ な い	該 当 し な い
1	1	2	3	4	5	
2	1	2	3	4	5	
3	1	2	3	4	5	
4	1	2	3	4	5	
5	1	2	3	4	5	
6	1	2	3	4	5	
7	1	2	3	4	5	
8	1	2	3	4	5	6
9	1	2	3	4	5	
10	1	2	3	4	5	
11	1	2	3	4	5	
12	1	2	3	4	5	
13	1	2	3	4	5	
14	1	2	3	4	5	
15	1	2	3	4	5	
16	1	2	3	4	5	
17	1	2	3	4	5	6
18	1	2	3	4	5	6
19	1	2	3	4	5	
20	1	2	3	4	5	6
21	1	2	3	4	5	
22	1	2	3	4	5	

アンケート分析結果(例)

講義形式の64授業を抽出し、これらの授業の評価に回答した延べ1,163名分(有効分)を分析対象とした。回答者の学年分布は以下の通りである。

課程/学年	1年生	2年生	3年生	4年生	その他
学校教育課程	277	352	119	33	9
地域文化課程	177	39	8	5	1
地域社会課程	110	41	6	1	2
計	564	432	133	39	12

平均評定値2点以下：学生からの評価が高い授業

整理番号 031

受講生数：70名

課程・学年構成

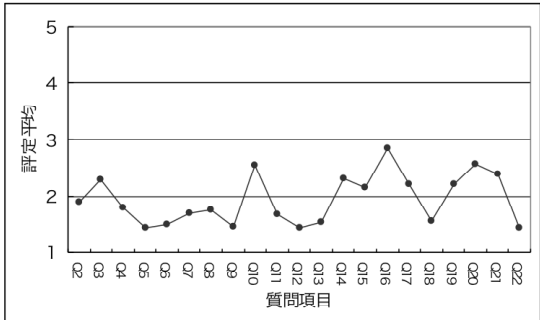
学校教育課程 70名(1年7名, 2年57名, 3年1名, 4年5名)

地域文化課程 0名

地域社会課程 0名

その他 0名

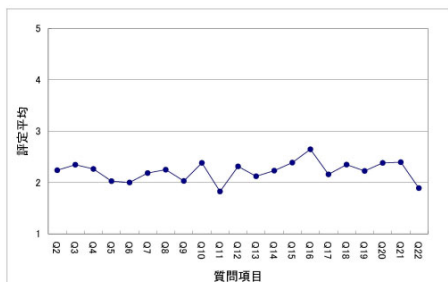
平均評定値：1.93



〔注〕2.5点以上：評価が低い授業

質問項目(項目2~項目22の全体平均値)

下図は、各項目の評定平均値を示している。良くも悪くもないという評価なら平均評定値は、3付近に来るはずだが、すべての項目で2点台前半の評定値である。ポジティブな評価が得られたと考えられる。とくにQ11(先生は授業の準備を十分にしていた)、Q22(この授業は全体としてよい授業であった)は、2点以下と評定が高い。





資料 1-2-10 ( 続き )

学生による自由記述 ( 抜粋 )

整理番号031

記述 1 学外へ ( 博物館 ) 見学へ行ったり、土笛を作ったりと、子供と一緒に教師も楽しめるといふ事を目的にした要素を沢山教えてもらいました。

記述 2 今までの考え方を換えられた授業だったので良かったです。

記述 3 博物館へ行ったり、土笛を作ったり実際に自分でも体験できたのが面白かった。

記述 4 大変楽しかったです。また教師としての方向性を見つける事ができました。有難うございました。

記述 5 土笛作りのように、めったに体験する機会のない事をする事ができて、ラッキーでした。

記述 6 歌舞伎や土笛など興味のある事ばかりできて楽しかった。

記述 7 座席数の確保、増加。

記述 8 新しい考え方がとても多く得られたと思います。とても楽しく、とって良かったと思えるような授業でした。先生が素敵でした。

記述 9 先生のしゃべりが面白く、とても楽しい授業でした。授業以外にも、博物館や子供歌舞伎など、この授業を受けたからこそ得られた事がありました。また、教師のあり方なども深く考えさせられる内容で、これからは役に立たせたいです。有難うございました。

記述 10 この授業を受けて、教師の現状や子供の反応など、勉強になる事が沢山ありました。子供カブキや博物館見学など、先生のおかげで広く学ぶ機会が持てて、本当に良かったです。また、自分で土笛作りも、子供帰った気持ちで楽しく取り組む事が出来ました。先生の教育への考え方がいいなあと感じました。

記述 11 この音楽教材研究では、「音楽を教える」という考えではなく「音楽で教える」という考えのもとに、実際に小学校勤務の経験がある先生の現場の話が聞けたので、大変中身のある授業であったと思う。実際に自分が現場に出た時に役に立つと思われる教材づくりについて考えていただけたという印象が強く残っている。

記述 12 第一に教職に対する考え方が大きく変わった。笑い最高です！

記述 13 本当に毎回楽しい授業でした。音楽の事だけに固執せず、教育現場の話が色々聞けて日々刺激となりました。

記述 14 音楽の教材についてだけの話ではなく、現在の教育現場の話が聞けたので有意義なものになった。

記述 15 先生の考え方とかが、非常に面白かったです。

記述 16 教育の現在の状況の事も分かったし、先生の軽快なしゃべりが面白かったです。

記述 17 教育のリアルな現場の実状や問題点を明確に指摘して考えさせられた。将来、役に立ちそうな内容の授業だったと思う。

記述 18 教育現場の話をとくさん聞けて本当に良かった。実際小学校での教員時代を経ている先生という事もあり、とても実用的で中身のあふれる授業でした。

記述 19 教材研究というと指導案作りが中心になりがちだが、この授業は「教材」の研究という意味で、実のあるものになった。

記述 20 現場の話が聞けて大変ためになった。本当にいい授業だった。面白かったし、わかりやすい。

記述 21 今まで何度か指導案を書く機会がありましたが、この授業を受けて「生徒にどんな力を付けさせたいのか」という事をまずしっかりと考えた教師の創意あふれる授業作りが大切なのだという事を痛感させられました。

( 平成 18 年度授業評価実施報告書 )

企業を対象にアンケートを実施し【資料 1-2-11】、企業が求める人材養成の視点をも踏まえ、学生のコミュニケーション能力を始めとする諸能力を向上させるためにワークショップ型授業を導入した教育課程改善を行った【資料 2-1-7 : P24】。

資料 1-2-11 企業アンケート ( 平成 17 年度実施 )

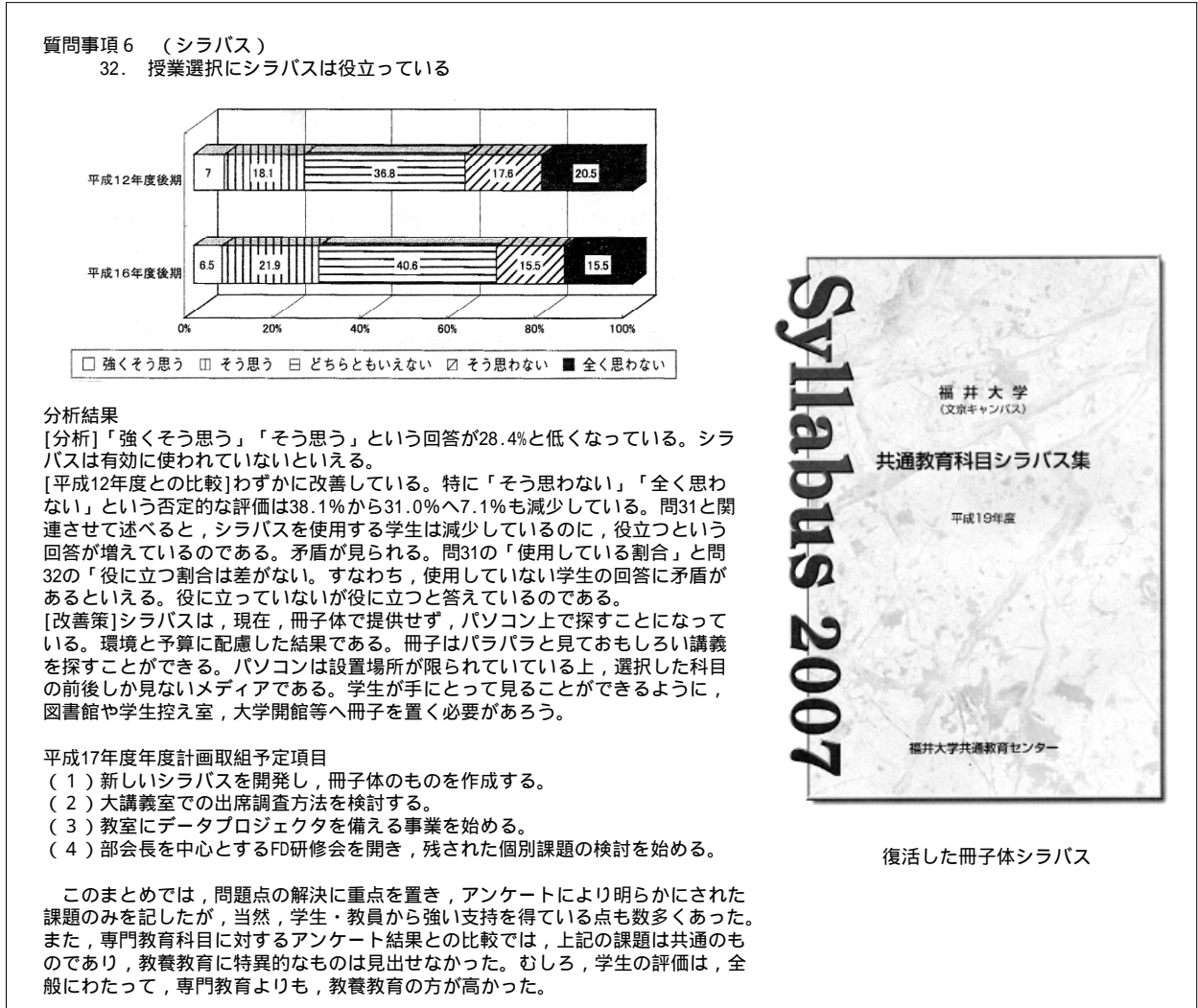
項目	学生に求める能力や資質	得点
1	幅広い知識や教養	5
2	専門的知識や教養	4
3	知識や情報をもとに自分の意見をまとめ、相手に伝える力	15
4	免許・資格	2
5	新しいものや考え方を理解し、取り入れる能力	16
6	社会人として何をやりたいのかについての明確な意識	17
7	周囲の人とのコミュニケーション能力	25
8	異なる考え方や文化を持った人とも一緒に活動に取り組める能力	5

これまで卒業生を2名以上採用している企業10社に対して、採用に際して重要視する能力や資質を質問した。重要度が高い順にそれぞれ4,3,2,1点を配して各項目ごとの得点を集計した。

( 外部評価のための資料, 平成 19 年 )

教養教育は、共通教育自己点検・評価実施小委員会が中心となって平成16年度に2つのアンケートを文京キャンパスの学生・教員を対象に行った。いずれのアンケートも報告書を公表することで教員への周知が徹底された。またその結果を踏まえて、シラバスの冊子化の復活等の改善策を実施した【資料1-2-12】。

資料1-2-12 共通教育アンケート（抜粋）



(平成16年度共通教育に関する後期授業アンケート調査報告書)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

社会や学校関係者の期待に応え、実践力を持った担い手を育てる教員養成の教育課程を実現するために、実践的研究能力の高い教員の採用を、全国に先駆けて組織的・計画的に進めている<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 資料1-1-3: 学部・研究科企画委員会要項: P4

資料1-1-5: 教職大学院の人事に関わる人事協議会の構成及び人事の流れについて: P7

資料1-1-6: 実務家教員公募要項例: P7

教育目標達成のため、FD・カリキュラム・評価の委員会を始めとして学部を挙げて教育内容・方法の改善に継続的に取り組む強固な体制が構築されており、それは、そ

の下で教員のFD活動，学生による教育課程・授業評価・卒業時の満足度調査，さらには企業アンケートを行うこと等を通じて，本学部の教育水準の向上に大きく寄与している。例えば，地域科学課程を平成20年度から出発させ得たことは，この体制が関係者の期待に応じて現実に機能していることの一証左である<sup>2)</sup>。

<sup>2)</sup> 資料 1-2-1：カリキュラム委員会要項：P9

資料 1-2-2：FD委員会要項：P10

資料 1-2-3：FD活動状況と報告書：P11

資料 1-2-8：学部及び研究科評価委員会要項：P15

資料 1-2-9：授業評価実施報告書：P15

資料 1-2-10：授業アンケート実施例：P16，

資料 1-2-11：企業アンケート（平成17年度実施）：P17

資料 2-1-7：平成20年度から出発した地域科学課程：P24

別添資料 1-1：学部・研究科企画委員会を中心とした学部・大学院の充実に向け・・・：P55

分析項目 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 2-1 教育課程の構成

(観点に係る状況)

学校教育課程は、教科教育系コースと発達科学系3コースに分かれる。教科教育系は、言語教育、理数教育、芸術・保健体育教育、生活科学教育、社会系教育の5コースに分かれ、各コースでは小学校1種 - 中学校2種の教員免許取得を卒業要件とする1系と、小学校2種 - 中学校1種を卒業要件とする2系に、発達科学系は、教育実践科学、臨床教育科学、障害児教育の3コースに別れ、小学校1種中心(3系)、中学校1種中心(4系)、養護学校1種中心(5系)に分かれた教育課程が編成されている。地域2課程では、地域文化課程は生涯学習と異文化交流、地域社会課程は行政社会と地域環境の2コースずつに分かれ、教育課程が編成されている【資料2-1-1,資料2-1-2:P21】。

資料 2-1-1 学校教育課程卒業要件

[学校教育課程]		卒業要件単位					
		教科教育系		発達科学系			
		1系	2系	3系	4系	5系	
		初等教育を中心として履修するコース	中等教育を中心として履修するコース	小学校1種を中心して履修するコース	中学校1種を中心して履修するコース	小学校1種と養護学校1種を中心して履修するコース	
共通教育科目		38	38	38	38	38	
(大学教育入門セミナー)		(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
基礎教育科目	外国語科目	(12)	(12)	(12)	(12)	(12)	
	保健体育科目	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	情報処理基礎科目	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	共通教養・副専攻科目(5分野から均等履修)	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)	
専門教育・副専攻科目(集中履修3科目)	(6)	合わせて20	(6)	合わせて20	(6)	合わせて20	
共通教養又は専門教育・副専攻科目(自由選択)		(4)	1	(4)	1	(4)	1
課程共通科目		6	6	6	6	6	
コース共通科目		4	4	4	4	4	
教育の基礎理論に関する科目		6	6	6	6	6	
専門教育科目	教育課程及び指導法に関する科目	26	22	24	10	24	
	各教科の指導法(教材研究)	(18)	(12)	(18)		(18)	
	各教科の指導法(教科教育法)	(2)	(4)		(4)		
	教育課程の意義及び編成の方法	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	特別活動の指導法		(12)		(12)		
	道徳の指導法	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
	教育の方法及び技術	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	4	4	4	4	4		
教育実践研究(教育実習を含む)		10	10	8	8	10	
教科専門科目	(小学校教科に関する科目)	(8)	(4)	(8)		(8)	
	(教科に関する科目)	(18)	(28)	(10)	(28)	(20)	
教科・教職選択科目(コースの専門科目)		10	8	22	26	10	
卒業研究		8	8	8	8	8	
合計		138	138	138	138	138	

各欄の( )内の単位を含めて履修すること、  
 ( )内は中学校一種免許状を取得する場合に必要

1 憲法A(総論・統治機構)2単位及び憲法B(人権)2単位合計4単位を含めて履修すること。  
 2 養護学校教員免許状の専門科目である。

教科教育系:言語教育、理数教育、芸術・保健体育、社会系教育、生活科学教育の各コース  
 1系は、小学校1種、中学校2種が卒業要件であり、初等教育を中心として履修するコースである。  
 2系は、中学校2種、中学校1種が卒業要件であり、中等教育を中心として履修するコースである。  
 教科教育系(全コース)の学生は、上記1系、2系のどちらかを選択して、履修すること。

発達科学系:教育実践科学、臨床教育科学の各コース  
 3系は、小学校1種を中心に履修するコース  
 4系は、中学校1種を中心に履修するコース  
 教育実践科学コース及び臨床教育科学コースの学生は、上記3系、4系のどちらかを選択して、履修すること。

発達科学系:障害児教育コース  
 5系は、小学校1種と養護学校1種が卒業要件であり、障害児教育を中心として履修するコースである。  
 障害児教育コースは、5系により履修すること。

\*学校教育課程の学生は、共通教育科目の専門教育・副専攻科目(集中履修)として、教科国語基礎(書写を含む)、教科社会基礎、教科算数基礎、教科生活基礎、教科保健基礎、国際理解基礎、生活技術基礎から6単位以上履修しなければならない。なお、ここで6単位を超えて修得した単位は発達科学系4系を卒業要件にする学生を除き、専門教育の「教科・教職選択科目」の単位とすることができる。

資料 2-1-2 地域 2 課程卒業要件

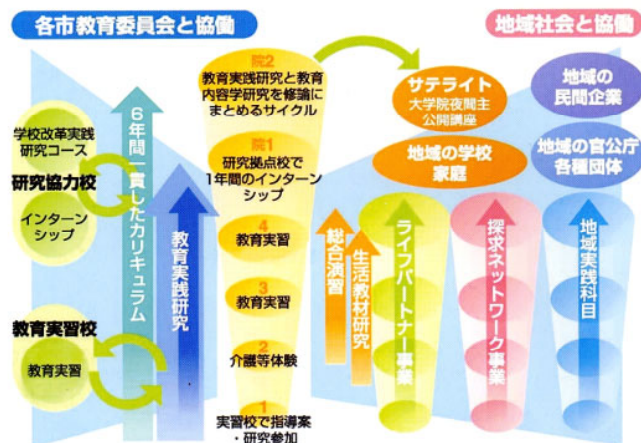
[地域文化課程]		卒業要件単位			
		地域文化課程			
		生涯学習コース		異文化交流コース	
共通教育科目		38		38	
(大学教育入門セミナー)		(2)		(2)	
基礎教育科目	外国語科目	(12)		(12)	
	保健体育科目	(2)		(2)	
	情報処理基礎科目	(2)		(2)	
共通教養・副専攻科目 (5分野から均等履修)		(10)	合わせて 20	(10)	合わせて 20
共通教養又は専門教育・副専攻科目 (集中履修3科目)		(6)		(6)	
共通教養又は専門教育・副専攻科目 (自由選択)		(4)		(4)	
専門教育科目	地域研究基礎科目	18		18	
	基礎専門科目	18		18	
	コース専門科目	38		38	
	地域実践科目	4		4	
	卒業研究	8		8	
	小計	86		86	
合計		124		124	

各欄の( )内の単位を含めて履修すること。

(平成 16 年度専門教育履修手引き)

学部を構成する二つの柱，教育と地域について，それぞれの固有の課題と共通の基盤と相互性という理念的な認識に立ち，実践的な課題に対する探究と実践の力を培うプロジェクトを中心にした教育課程編成を行ってきている【資料 2-1-3，別添資料 2-1：P61】。

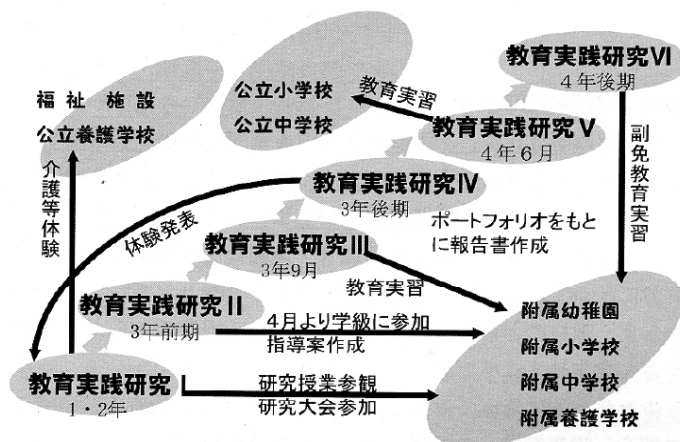
資料 2-1-3 地域と協働する実践的教員養成プロジェクト



(特色 G P 実施報告書，平成 19 年 3 月)

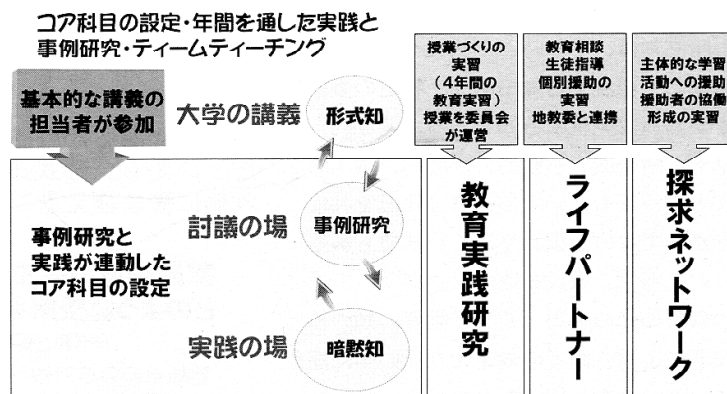
学校教育課程でのプロジェクト科目としては，1年次から4年次までを通した教育実習関連科目（教育実践研究 - ），地域の不登校の子どもたちを支える活動（ライフパートナー），子どもたちと一年間にわたって共同プロジェクトを展開していく活動（探求ネットワーク）がある。こうしたプロジェクト的科目では，省察的実践活動とその組織化を重ね，活動を発展させてきている。これらは，教員養成GPに採択された【資料2-1-4，資料2-1-5，資料1-2-5：P13，別添資料1-2：P57，別添資料1-3：P58】。

資料2-1-4 教育実践研究の展開



（外部評価のための資料，平成19年）

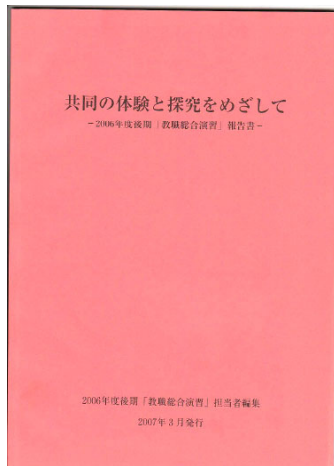
資料2-1-5 ライフパートナーと探求ネットワーク活動



（GP報告書，平成19年3月）

学校教育での総合的な科目に対応する生活科関連科目・総合教育科目では、教科専門・教科教育・教育科学の担当者が共同して授業を進める体制を構築し、学生が協働して主体的に学ぶ機会を提供している。受講学生の評価も高い【資料 2-1-6】。

## 資料 2-1-6 教職総合演習の内容と報告書



公開授業 教職総合演習「中間発表会」  
- 共同の体験と探究をめざして -  
平成19年11月26日（月）13：30～14：30  
場所：大1講義室（全ブロック一緒に発表します）

Aブロック 高山善行（言語教育講座）  
「福井大学版 キャンパスことば辞典」の構築  
代表グループ名：ザ・ソナタクラブ（代表福地美紀さん・音楽）  
テーマ：「キャンパスことば-学外系-」（お店、アルバイト関係など）

Bブロック 中田隆二（理数教育講座）  
「エネルギー・環境を考えるための科学的リテラシーとは？」  
B-1：僕たちの食べているものを調べよう  
B-2：ごみ問題の解消法を考える  
B-3：水

Cブロック 清水史郎（芸術・保健体育教育講座）  
「ニュースポーツを創造してみよう」  
C-1：ニュースポーツ1  
C-2：ニュースポーツ2  
C-3：ニュースポーツ3  
C-4：ニュースポーツ4

Dブロック 荒井紀子（生活科学教育講座）  
「自分らしさとジェンダー -男女共同参画社会について考えよう-」  
D-1：ジャム男組「女性の葛藤」  
D-2：Team田んぼ「これからの男女の生き方」  
D-3：アートレンジャー「SexとGenderのBorder」

Eブロック 清水泰幸（社会系教育講座）  
「戦争・地域紛争を考える」  
代表E-1 「パレスチナとイスラムにおける紛争から考える」  
代表E-2 「民族浄化の歴史を紐解く」

Fブロック 寺岡英男（発達科学講座）  
「動物園の科学教育プログラムに参加し、自らが動物の行動観察を行うとともに、観察会を組織しながら、子どもの学習やプログラムのあり方を学ぶ」  
F-1：「学習する場としての動物園」1  
F-2：「学習する場としての動物園」2  
F-3：「学習する場としての動物園」3  
F-4：「学習する場としての動物園」4

## 教職総合演習レポートから

今回の教職総合演習では、大きなテーマこそ設けられているが、そこから何についてみていくかは自由であり、それぞれが新たな学びを得るものであった。私が調査したキャンパス語であれ、ミネラルウォーターに関する調査であれ、ニュースポーツを創造する取組であれ、道徳的な縛りがなく、自由に考察できる。このことが、子どもたちの興味、関心を引き出し、自ら考え解決するという力を生み出すのではないだろうか。そして、そのためには、教師は広い分野に対して、広い知識を持っていなければならない。

教師は、特定の教科を教える存在、特定の教科を教えることができればよいという時代ではなくなった。特に、小学校は、人生の基盤となる時期である。教科書の内容にとらわれず、広い視野を持って子どもを教育していかなければならない。多くの言葉に触れ、人に触れる。その中には人生にとって大変重要なものが含まれている。そうした活動をすることで、子どもたちの可能性というものは限りなく広がっていくことになるだろう。

福祉などのテーマに沿って考えさせるのも大変重要であるが、教科書にとられないテーマで調査、考察することで子どもたちの可能性を広げることができる。そして、そのためには、教師は広い視野を持っていなければならない。私は教職総合演習の授業を通して、以上のことを考えた。（平成19年度後期「教職総合演習」報告書、P 72より抜粋）

教職総合演習の授業のねらいのひとつに、「総合的な学習の時間」の内容づくりに連動させるというものがあった。当初私たちは「総合学習の指導案づくり」を目指して活動していたが、子どもにエネルギーと環境を考えさせるような指導案を作るのは大変難しいことだと実感した。ただでさえ難しいエネルギーや環境問題について、子どもたちが主体的にそれらに取組むためには、わかりやすく、身近な問題を取り上げて考えていくことが必要であると思う。これから私が子どもを指導する立場になった際、どのように指導していけばよいのだろうか。これまでに実践されてきた例を調べ、まずは例にならって実施していくことから始めるべきだろう。また、「総合的な学習」は、今回ブロックで分けたように言語、環境、エネルギー、芸術、保健体育、生活、社会、科学、など様々な分野にわたって取り組んでいくものである。視野を広げ、自分の専門以外でも指導できるよう準備が必要であると思った。中間発表、最終発表で他のブロックの発表を聞き、まだまだ知らないことが多く、興味関心のある内容も多かった。これから見聞を広め、知識を増やし深め、今後の指導に生かしていきたいと思う。（平成19年度後期「教職総合演習」報告書、P 79より抜粋）

（教職総合演習報告書）

地域2課程では、地域の学習・文化・行政・産業・生活・環境などに関わる、多様で専門的な力量形成のためのカリキュラムが編成されている。中でも「地域実践科目」は、地域の行政・企業と協力関係を築きながら、大学生が地域における活動に直接携わり学んでいく取組を行っており、学生の評価も高い【資料 2-1-7、資料 2-1-8：P25、資料 3-1-5：P35、資料 4-1-2：P41】。

資料 2-1-7 平成 20 年度から出発した地域科学課程



（地域科学課程パンフレット）



資料 2-1-8 地域実践科目

コース	2 年次後期	3 年次前期		3 年次後期
生涯学習		社会教育実践研究 スポーツ・健康実践研究	地域 ボランティア 学習	地域教育文化実践研究 スポーツ・健康実践研究
異文化交流	国際交流実習	国際交流実習		
行政社会		行政・企業等実地研修 行政・企業等実地研修		
地域環境	環境調査業務実地研修	環境調査業務実地研修		

( 外部評価のための資料，平成 19 年 )

共通教育は、「大学教育入門セミナー」、「基礎教育科目」、「教養教育・副専攻科目」という重層的な科目群で構成され、学生が自分で科目習得をデザインできる履修制度や市民が学生と一緒に受講できる市民開放プログラムが組み入れられている。教養教育のこうした取組は、特色 G P で採択された【資料 2-1-9】。

資料 2-1-9 平成 17 年度特色 G P の概要

**複合的・学際的な現代社会に配慮した豊富な教養教育科目を現代的に編成しています。**

教養教育科目は、教養教育のために開講されている科目A群と、専門科目の一部を他専攻・他学部学生に開放している科目B群からなり、それらは内容によって分野に、さらに分野は系に分類されています。

**B群 専門科目**  
(164科目)

専門科目の選択には、教員が学生の相談を受けるアドバイザー制度があります。

分野名	系名
学校教育	学校教育
地域文化	地域文化
地域社会	地域社会
物質工学	応用化学 材料工学 生物応用化学 物質工学
システム工学	機械工学 電気・電子工学 情報・メディア工学 建築建設工学・知能システム工学

----- 必修選択20単位 -----

分野名	系名
社会	社会と歴史 現代社会の見方 生活と生活空間の科学
人間	思想と人間 人間の科学 スポーツと健康の科学 英語コミュニケーション
文化	日・中言語文化 欧米の言語と文化 美術 音楽 日本語・日本文化
技術	システムと情報 生活と技術 物質と技術
自然	自然のこぼれ 物質とエネルギー 地球と生命

**A群 共通教養科目**  
(175科目)

情報リテラシー  
科学技術リテラシー  
環境問題  
複合的・学際的な科目を重点に開講

入門セミナー 外国語 保健体育 情報処理基礎 **必修18単位**

教養教育科目の構成

情報リテラシーや科学技術リテラシー、現代社会の複合的・学際的な問題に関する科目等を新設し、教育内容を一新しました。教育情報処理については、新たに必修科目を設け、独自の教材を作成すると共に、TAを活用し、急速な情報処理技術の発展にも対応できる教育体制を確立しました。それまで弱かった倫理を含む科学教育技術の充実、工学部教員の動員によって実現しました。外国語教育は40名以下のクラス編成とし、従来の哲学、文学を学ぶ語学から、スキル中心のものや異文化を学び、コミュニケーション能力の育成を目的としたものになりました。

**修学意欲を学年進行と共に促す独自の履修制度**

教養教育科目の20単位を、均等履修・集中履修・自由選択履修に分けて修得します。

この履修制度は、低学年で特定の専門に偏ることなく広く学問に触れ(均等履修)、学年進行に伴い、学生の自覚を促がし、自分の専攻と異なる分野への関心(集中履修)が高まるように工夫されています。

**履修制度**

一つの系から10単位  
**副専攻修得**

↑

自由選択履修 4単位

集中履修  
A + B群の1分野から6単位

**高度な幅広い視野を目指した副専攻制度**

副専攻制度は均等履修を除く10単位を一つの系から修得した場合に、その系を副専攻として修得したことを認定する制度です。  
この制度は全国に先駆けて始められました。

4 年

3 年

2 年

1 年

均等履修 A 群 5分野 各2単位 計10単位

助言教員制度 アドバイザー制度 オフィスアワー制度が、学生の科目の選択を補助します。

観点 2-2 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

学校関係者の期待(子どもを理解し,地域や子どもの多様さに対応できる芽を大学で育ててほしい)に対応し,教育実習関連科目を始め,ライフパートナー,探求ネットワークなどの子どもたちと関わるプロジェクト的な科目を設けて実践的な能力の形成を図り,要請に応じている【資料 2-1-5:P22,資料 4-1-8:P45,資料 4-2-3:P47】。

企業からの期待・要請(「人とのコミュニケーション能力」「新しいものや考え方を理解し,取り入れる能力」の育成,「社会人としてやるべきことの明確な意識の獲得」)に対応し,それに応える資質能力の形成を図る教育課程編成を行っている【資料 1-2-11:P17,資料 2-1-7:P24,資料 2-1-8:P25,資料 4-1-9:P45】。

卒業生からは,学部と学校・行政・企業との交流や連携を密にすることや,子どもや地域の人たちとのふれあいを深める機会を増やすことへの期待・要請があり,これらに対応した学部の教育課程づくりを進めている【資料 2-2-1,資料 2-1-3:P21,資料 2-1-7:P24,資料 4-1-8:P45,別添資料 2-1:P61】。

資料 2-2-1 平成 18 年度ホームカミングデー出欠八ガキ

**ホームカミングデー(平成18年10月1日開催)出欠葉書の記載意見から**

**(学芸学部卒)**

- 教育地域科学部についても、地元福井への貢献をいっそう強められるよう希望します。
- 開かれた大学の一環として、教育現場の支援を積極的に働きかけてほしい。

**(教育学部卒)**

- 地域の教育レベルアップのため、一層の充実発展を祈念いたします。地域、学校の更なる連携協力をお願いします。
- 教育実習の一層の充実をお願いします。また、心身ともにたくましい教員になれるよう、ご指導してください。
- 教え子が教職の道で頑張っている姿をみて喜んでおります。「子どもが好き」「教えることに情熱を」という人が本当の教育者と思うのでぜひそんな学生さんを育てていただきたいと願っております。

**(教育地域科学部卒)**

- 学部と行政、学校現場、関係する企業との交流、協力、連携を密にすることを考えて欲しい。学生の活躍をもっと社会に見せるよう努力してほしい。
- 現職の教員をサポートする体制を強化してほしい。福大出身の教員が増えるよう期待している。
- フレンドシップ事業、オープンキャンパス等子どもや地域の人たちとのふれあいを深める機会を増やし“人を育てる”視野から教職を学ぶことを更に重視して行って下さい。

(基礎資料)

市民の生涯学習を大学として支えていくために,平成 14 年度から「生涯学習市民開放プログラム」を開始し,市民の学習ニーズに応える,開かれた大学づくりを進めている【資料 2-2-2】。

資料 2-2-2 生涯学習市民開放プログラム

受講者数と年齢構成

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80以上	不明	男	女	計
平成16度前期	1	5	6	17	28	13	0	0	20	50	70名
平成16度後期	2	1	5	18	22	11	2		20	41	61
平成17度前期	0	2	7	20	26	13	2		25	45	70
平成17度後期	1	3	4	15	24	12	2		26	35	61
平成18度前期	2	1	4	14	27	14	0		26	36	62
平成18度後期	0	1	3	11	18	15	1		22	27	49
平成19度前期	2	4	2	8	24	19	1		29	31	60

(外部評価のための資料,平成 19 年)

(次頁に続く)

市民開放プログラムの紹介記事(福井新聞、平成16年12月6日)

福井大文芸キャンパスの講義を市民に開放し、現役学生と一緒に学んでもらう「生涯学習市民開放プログラム」が好評だ。豊富なメニューと低料金、年齢を重ねても衰える学習意欲を後押し、多くのリピーターを獲得している。学生の刺激にもなっており、年齢を超えた交流も生まれている。

国立大で初めて国の認可を一度(昨年度未だ廃止)と異なり、二〇〇二年度に始まる。聴講制度では授業料などはプログラム、教養科目に加えて、科目六万五千六百円。本年度から専門科目も開講が必要だ。これに対し、受講料は二倍に引き上げ、双方合わせて前年度百十六科目、後期百四十二科目と定めている。

二科目と選択の幅が従来の約二倍に広がった。前後期合わせた本年度の受講資格として年齢や学歴の制限は、四十七代の主婦や定年退職後の男性が多い。

# 世代を超えて

学生に交じり、建築設計の講義を受ける井口幸恵さん。熱心な学習態度が学生に刺激を与えている＝福井大



## 福井大「市民開放講義」が好評



千福町。昨年度後期から受講しており、発達心理学から建築設計、環境エネルギーまで、幅広い科目が、初めは素人同然だが、疑問点をその都度質問して解決するよう心掛けていた。講義が面白くなって、難解な内容を理解できたときの喜びが、

# 学習意欲刺激

英語の科目を中心に、初年度から欠かさず受講している船木純一さん(三〇)福井市手賀一丁目。商社勤務時代に海外取引に携わって語学に関心を持ったのがきっかけ。「学生と並んで講義を受ける」と気分が若返る。予習復習が欠かせず、頭も出る。カルチャー教室と違い、たしなみ程度の感覚では続かないから気がきく。話すと話す。「大学などは専門的な学問に触れたかった」とは井口幸恵さん(三〇)武生市東

### 学生と交流も

交を深めて切磋琢磨しよう」と、同窓会をつくる話も浮上。受講者同士だけでなく、学生と交流できるのも魅力の一つで、講義後に一緒に食事したり、喫茶店でおしゃべりを楽しむ受講者もいるという。

学生と意気投合してイベント企画グループまでつくってしまったり、井口さんは「今後は一受講者として、学生と社会との間の接点になりたい」と話している。

講義後、若い学生と昼食で談話する生涯学習市民開放プログラム受講生(右)と。これも大学の学びの魅力の一つ(福井大)

「豊富な科目、低料金」

「一緒に講義を受けている常備明浩さん(三三)工学部二年は「何となく流れて身を任せて大学に進学した学生と違い、目的意識を持って大学に来ているから、やる気が伝わってくる。自分もしっかりしなければ」と刺激を受けている様子。同学部の松下聡教授は「教養方を「夫して分かりやすく、講義に改善する契機となる」と話すなど、教官へのプラス効果もあるようだ。

受講者の間では、互いに親

市民開放プログラム受講生のコメント

中座 照子さん (78歳)

「知るは楽しみ」

平成15年から受講を始め、文学、福祉、ジェンダー等色々聴講させていただきました。「知るは楽しみ」と言いますが、年齢に関係なく学ぶことは嬉しいものです。戦前戦後生き残った私は十分な教育を受けていません。今、こうして若い人たちと同じ教室で学生気分を味わうことが出来て本当に幸せです。講義内容は難しく理解出来ない時もあります。それでも話した頭で挑戦したレポートに対して、先生から一言いただくことが本当に嬉しいものです。これからも受講していきたいと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。



大味 禮子さん (76歳)

「新しい自分に出会う」

今から6年前、カーラジオから流れてきた「福井大学一般市民開放講座生募集」のお知らせは、孫でても一段落ついて、ほっとしていた私の耳に快く響きました。弾む心で申し込み、現在まで11講座を受講しました。自らの学歴は低いのですが、年の功に助けられて先生のお話はよく理解出来るし、提出しなければならぬレポートにも何とか挑戦してきました。学ぶことは何處になっても新しい自分に出会うことだと思います。そしてこの制度に感謝しています。



田島 紀男さん (66歳)

「みつめなおして」

昨年5月に停年退職し、この講座を受講しました。動機は自分をみつめなおす契機にしたいと思ったからです。前期、後期二科目選択しましたが、各科目共、担当の先生に分かりやすく講義を進めていただき、楽しく受けることが出来ました。ただ気になったことは一部の学生の方のマナーです。教室の前の方で堂々とした居眠り、授業開始後の前の入口からの無会釈の入室等々、礼儀、作法といった日本古来の良き伝統が段々無くなってきているように感じられ残念に思っています。教育とは共育(共に育つ)といわれます。このプログラムを通じて、若いも若きも共に成長できればと思っています。担当教員、スタッフの皆様は心よりお礼を申し上げます。



葛野 昭さん (80歳)

「自分の時間の再発見をめざして」

これで生涯学習市民開放プログラムの参加は6年を過ぎました。この間、3年前より妻が考えてもなかった脳梗塞を発病し、その介護をしつつの通学となりました。朝は5時半起きで介助をし、テイサービスの日は迎えのバスを見送ってからの電車通学。この様に高齢化社会での生涯学習は、幾多の山を越していかなければならないものです。そして、最近になって市民開放講座に自分の時間を求めていることに気がつきました。眠ってしまつて電車を乗り越したことは何度もありますが、苦しい中でも孫と同年齢の学生諸君と共に受講することは、むしろ楽しいものです。何年続けられるか分かりませんが、この様な楽しさを100歳まで続けてみたいものです。



(福井大学広報紙 CAMPUS EXPRESS vol.22, 平成20年3月)

単位互換については、平成17年度までの県内大学等単位互換制度の下で本学部学生の履修者・単位修得者数は1桁であったが、平成18年度から北陸地区の国立大学法人間での双方向遠隔授業システムの開設により、履修者・単位修得者数は20名を超え(平成19年度)、格段に実績を上げ、学生の要請に応えている【資料2-2-3:P28】。

資料 2-2-3 単位互換制度の利用状況

単位互換先	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
福井医科大学	4 (4)			
福井県立大学	4 (3)	4 (3)	1 (0)	
仁愛女子短期大学	1 (1)	1 (0)	2 (2)	2 (2)
富山大学			2 (1)	4 (3)
金沢大学			15 (11)	23 (20)
計	9 (8)	5 (3)	20 (14)	29 (25)

数値は履修者数（単位修得者数：内数）

（基礎資料）

科目等履修については、例年相当数の履修生を受け入れ、教養や教員免許取得等の要請に応じてきている【資料 2-2-4】。

資料 2-2-4 科目等履修生の状況

		大学院(教)	教育地域科学部
平成16年	前期	0	19
	後期	0	21
合計		0	40
平成17年	前期	2	32
	後期	2	27
合計		4	59
平成18年	前期	0	13
	後期	0	15
合計		0	28
平成19年	前期	1	11
	後期		
合計			

（外部評価のための資料，平成 19 年）

平成 19 年度前期，出願者の履修目的と出願科目（新規分）

氏名 生年月日	性別	国・ 本籍	最終学歴	目的	出 願 科 目	単位数 合 計
A 昭51.1.13生	男	石川	上越教育大学 大学院 平成14.3修了	高等学校公民科 免許取得のため	<教>公民科教育法 (2)	2
B 昭58.3.2生	女	福井	福井大学教育地域 科学部 平成17.3卒	幼稚園教諭の免許 取得のため	<教>体育実習A(1) 幼児理解の理論と方法(2)	3
C 昭56.10.22生	男	福井	福井大学 工学部材料開発工学科 平成16.3卒	工業職員免許取得 のため	<共>憲法概論(2)	2
D 昭53.11.8生	女	大分	関西大学 工学部生物工学科 平成13.3卒	教員免許取得の ため(高校理科)	<教>人間発達論研究 (2) 学校教育相談研究 (2)	4
E 昭58.1.10生	男	福井	皇學館大学 文学部教育学科 平成18.3卒	教員免許取得の ため(小学校1 種)	<教>理科実験観察法(2)	2
F 昭48.2.22生	男	福井	新潟大学 教育学部 平成7.3卒	中学校1種、高等 学校1種、英語免 許取得のため	<教>英語学講義 (2)、英語下エ キータン英作文 (1)、英語コミュニ ケーション英会話 (1)、英語コミュニ ケーション (1)、英米文学講義	11
G 昭59.6.19生	女	福井	福井大学 教育地域科学部 平成19.3卒見込	専門学校を受験す るために必要な科 目の履修のため	<共>心理学研究入門(2) <教>基礎生物学(2)、倫理学概論 (2)、基本統計学(2)、微分積分 学 (2)	10
H 1975.7.15生	女	中国	華東師範大学 平成7.6卒	修士課程への進学 のため	<共>応用日本語 (2)、衣生活の現 状(2) <教>保育学(2)、学習障害児教育概 論(2)、特別支援教育総論(2)	14

（基礎資料）

地域 2 課程の「地域実践科目」は、県内各地域の官公庁，企業や諸団体に赴き，実際の現場の業務に参加しながら，地域で行われている諸活動や諸課題の現実に触れて学び，その学びの体験を学生の学習・研究に活かすことを目的として実施されている。一部は福井県インターンシップ協議会主催の県内企業へのインターンシップと重なるが，学生にとって学習や就職，生き方を考える貴重な場として評価され，参加数は増加の傾向にある【資料 2-2-5：P29，資料 3-1-5：P35】。

資料 2-2-5 地域実践科目インターンシップ実施状況

コース名	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
生活科学		三国町役場 1			
生涯学習			大野市役所 1		
異文化			福井県文化振興事業団 1 福井放送株式会社 1 福井県奥越高原牧場 1 鯖江市役所 1 福井県立図書館 1 金津創作の森 1 福井県国際政策課 1 福井市みどり図書館 1 株式会社アイビックス 1	福井県立病院2 福井県国際マーケット戦略課 1 福井テレビジョン放送株式会社 1 福井県民生活協同組合 1 福井県立図書館 1 金津創作の森 1 春江図書館 1 敦賀市役所商工観光課 1 株式会社親和コンサルティング 1	福井ヤクルト販売株式会社 1 福井県国際交流協会 1 福井銀行 5 福井県立美術館 2 福井県 税務課 1 福井県国際・マーケット戦略課 1 勝山市役所福祉・児童課 1 福井県文化振興事業団 1 福井市立みどり図書館 1
行政社会	福井銀行 1 セーレン 1 ホームみつわ 1	ラブラー牧場 1 マリージョゼ 1 永田司法書士事務所 1 神田司法書士事務所 1 特別養護老人ホーム 1	越前松崎水族館 1 株式会社日刊県民福井 1 三国町役場 1 福井県文化振興事業団 1 敦賀市役所 市民生活部生活防災課 1 ラブラー牧場 1	永田司法書士事務所 1 社会福祉法人足羽福祉会愛全園 1 財団法人福井県文化振興事業団 1	福井県 販売開拓課 1
地域環境	県衛生環境研究センター 3		福井県雪対策・建設技術研究所 1 福井県海浜自然センター 2 福井県自然保護センター 2	大野市役所 1 福井県自然保護センター 2	福井県雪対策 2 福井市環境事務所 2 福井健康福祉センター 1 福井県衛生環境研究センター 2 株式会社サンコン 2 福井市園芸センター 1 福井市自然博物館 1
計	6名	6名	21名	16名	26名

(就職委員会資料)

本学部学生の留学や語学研修の要請に応える海外派遣や、外国人留学生の学部、研究生，教員研修，科目等履修等の多様な形態での受け入れに努め，国際交流を推進している【資料 2-2-6，資料 2-2-7：P30，資料 2-2-8：P30】。

資料 2-2-6 学生の海外派遣状況

年度	国名	派遣先大学名	目的	期間	人数	合計	奨学金等
16	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	5月	2	19	
	インドネシア	インドネシア大学	交換留学	11月	1		
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	4		日下部・グリフィス財団より補助
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	6週	14		日下部・グリフィス財団より補助
17	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	1年	1	22	
	アメリカ合衆国	モントクレア州立大学	語学研修	10月	1		
	中国	西安外国語大学	研修	8日	5		
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	1		日下部・グリフィス財団より補助
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	6週	14		日下部・グリフィス財団より補助
18	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	5月	1	22	
	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	1年	1		
	アメリカ合衆国	ラトガース大学	留学	10月	1		
	中国	西安外国語大学	交換留学	1年	1		
	ドイツ	ハンブルク大学	交換留学	1年	1		
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	3		日下部・グリフィス財団より補助
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	6週	10		日下部・グリフィス財団より補助
韓国	東亜大学校	サマースクール参加	2週	4			
19	アメリカ合衆国	クレムソン大学	交換留学	10月	1	6	短期留学推進制度奨学金
	中国	西安外国語大学	交換留学	5月	1		
	ドイツ	ハンブルク大学	語学研修	1月	2		日下部・グリフィス財団より補助
	韓国	東亜大学校	サマースクール参加	2週	2		
	カナダ	オカナガン大学	語学研修	6週	未定		

(外部評価のための資料，平成19年)

資料 2-2-7 外国人留学生の在学状況

年度	区 分	数	出 身 国	計
16	学部生	国費		8
		私費	中国 8	
	大学院生	国費	中国 1	11
		私費	韓国 1, 中国 9	
	研究生・教員 研修留学生	国費	ミャンマー 1, タイ 1, フィリピン 1, ブラジル 1, ドイツ 1	12
		私費	中国 4, 台湾 2	
	科目等履修生	国費	オーストラリア 1, ドイツ 1	6
私費		中国 3, ドイツ 1		
17	学部生	国費		4
		私費	中国 4	
	大学院生	国費		12
		私費	中国 12	
	研究生・教員 研修留学生	国費	インドネシア 1, フィリピン 1, 韓国 1, メキシコ 1, ドイツ 1, モロッコ 1	9
		私費	バングラデシュ 1, インドネシア 1, 中国 1	
	科目等履修生	国費	ドイツ 1, デンマーク 1	8
私費		韓国 2, 中国 3, 台湾 1		
18	学部生	国費		1
		私費	中国 1	
	大学院生	国費		18
		私費	バングラデシュ 1, 中国 17	
	研究生・教員 研修留学生	国費	タイ 1, ラオス 1, メキシコ 1, コスタリカ 1, ベルー 1, ドイツ 1	9
		私費	中国 3	
	科目等履修生 特別聴講学生	国費	ドイツ 1	9
私費		韓国 1, 中国 5, ドイツ 1, アメリカ合衆国 1		
19	学部生	国費		3
		私費	中国 3	
	大学院生	国費	1	16
		私費	バングラデシュ 1	
	研究生・教員 研修留学生	国費	15	7
		私費	ミャンマー 1, 中国 14	
	科目等履修生 特別聴講学生	国費	5	15
私費		ミャンマー 1, ブラジル 1, ベルー 1, ドイツ 1, イエメン 1		
		1		
		1		
		14	中国 9, 台湾 2, ドイツ 2, アメリカ合衆国 1	

注：特別聴講学生は協定校からの科目等履修生

(外部評価のための資料, 平成 19 年)

資料 2-2-8 留学生のコメント



**留学**

**異国の地で再確認した  
“教師” という目標**

教育地域科学部 学校教育課程  
河合 創

留学先は米国サウスカロライナ州にあるクレムソン大学。福井大学の姉妹校です。驚きだったのは、米国の学生がものすごく勉強すること。すっかり刺激を受けて、勉強漬けの4か月を過ごしました。初めのうちは語学力向上を目的にしていたのですが、教育の歴史やコミュニケーション学などを学ぶうちに、改めて“教師”という自分の目標を再認識することに。将来をじっくり考える貴重な体験だったと思いますね。



さよならパーティでのフンシーン



**留学**

**子どもたちの笑顔は  
万国共通ですね**

教育地域科学部 異文化交流講座  
ハルバート・アンナ・エリザベス

福井大学には2006年10月に来ました。ボランティア活動で留学費用が免除される奨学金システムを利用しているので、週に2回、附属幼稚園のお手伝いに通っているんですよ。もともと子どもが好きですから、子どもとの交流はとても楽しいですね。寮の仲間とレジャーなどで交流を深めて、すぐに一人暮らしにも慣れました。卒業後は大学院で医学を学び、病気で苦しむ子どもたちを助けることが目標です。



友人と一緒に教員への小旅行

(大学案内, 平成 19 年)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

社会や学校関係者の期待に応えるために、教育職員免許法に規定された教育課程の縛りがありながらも、これからの社会が求める市民的、専門的能力の形成を目指して、実践的な課題に対してその探究と実践の力を培うプロジェクトを中心にした教育課程づくりと改善の取組を進めている<sup>1)</sup>。

- 1) 資料 2-1-3: 地域と協働する実践的教員養成プロジェクト: P21  
 別添資料 2-1: 教育課程における実践的プロジェクト科目の位置づけ: P61

教育内容の編成に当たっては、附属学校をはじめとする学校や地域の行政・企業の期待に応じて、それらとの協働とネットワーク化の実現を図った。教育実践研究、ライフパートナー、探求ネットワークのプロジェクトの活動が、特色GP「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト」として採択され、高い評価を得ている<sup>2)</sup>。

- 2) 資料 2-1-1: 学校教育課程卒業要件: P20  
 資料 2-1-4: 教育実践研究の展開: P22  
 資料 2-1-5: ライフパートナーと探求ネットワーク活動: P22  
 別添資料 1-2: ライフパートナー事業の概要: P57  
 別添資料 1-3: 探求ネットワークの概要: P58

分析項目 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 3-1 授業形態の組合せと学習指導方法の工夫

(観点に係る状況)

(学校教育課程関係)

学校教育課程、地域2課程ともに、授業の形態として、プロジェクト授業(C)、探求型授業(A)、概説型授業(P)、主題別授業(T)に区分し、多様な組合せとなるよう工夫している。また各コースの授業は、講義、演習、実験、実習(実地見学も含む)等の指導方法が配慮されている【資料 3-1-1】。

資料 3-1-1 理数教育コース科目

平成16年度 教育地域科学部学校教育課程 理数教育コース (中学校教科理科に関する科目)

科 目	授業 区分	必修 選択必修の別 1系 2系	小 科 目	単 位	毎 週 時 間 数								備 考			
					1		2		3		4					
					前	後	前	後	前	後	前	後				
物理学・物理学実験	A		基礎物理学実験(コンピュータ活用を含む)	2					6							
	P		力学	2				2								
	P		電磁気学	2				2								
	P		熱・統計力学	2						2						
	P		近代物理学	2							2					
	A		物理学実験	2						6						
	A		物理学実験	2							6					
	A		物理学演習	2								6				
	化学・化学実験	P		基礎化学	2				2							
		A		基礎化学実験(コンピュータ活用を含む)	2				6							
		P		分析化学	2				2							
		P		無機化学	2				2							
		P		物理化学	2						2					
		P		有機化学	2				2							
A			化学計測実験	2							6					
A			化学合成実験	2							6					
A			化学演習	2								2				
T			化学特講	1											集中、隔年	
T			化学特講	1											集中、隔年	
P		環境化学	2					2								
生物学・生物学実験	P		基礎生物学	2				2								
	A		基礎生物学実験(コンピュータ活用を含む)	2				6								
	P		遺伝学	2					2							
	P		細胞学	2					2							
	P		生理学	2						2						
	P		形態・分類学	2						2						
	T		生物学特別講義	2							2					
	A		細胞組織学実験	2							6					
	A		形態・分類学実験	2							6					
	A		生物野外実習	2											集中	
	A		臨海実習	1											集中	
	P		生態学	2											集中、3年毎	
	P		微生物学	2											集中、3年毎	
	T		現代生物学特講	2											集中、3年毎	
P		多様性生物学	2				2									
地学・地学実験	P		基礎地学	2				2								
	A		基礎地学実験(コンピュータ活用を含む)	2				6								
	P		地球科学概論	2				2								
	P		地球科学概論	2					2							
	P		第四紀学	2						2						
	P		物理地学	2							2					
	A		地球科学実験	2							6					
	A		地質野外実習	2											集中	
	A		地球科学演習	2					2	2					通年	
	T		地球科学特講	1											集中	
	P		地域地質学	2							2					
P		土壌・岩石学	2							2						

(平成16年度専門教育履修手)

教育実践研究では、4年間に渡る学校での実習と大学における学習・研究を有機的に結びつけた実践的な授業を組織している。とりわけ3年次実習では、4月から実習クラスに関わり、9月に実習し、その後記録に基づいて省察検討するサイクルを構築し成果を上げている【資料 1-2-5:P13,資料 2-1-4:P22,資料 3-1-2,資料 4-2-3:P47】。

資料 3-1-2 教育実践研究 の授業計画 (平成 18 年度)

実施日時・場所	教育実践研究 (事後学習) 授業内容 (3年生 必修1単位)
10月6日(金) 10:30~12:00 第1教室	<p>全体的なオリエンテーション(授業の趣旨と計画)</p> <p>第1回「グループでの省察」(附属小・附属養護はクラス,附属中は教科)省察の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主実習4週間(教育実践研究)の振り返り(e-ポートの反省も)</li> <li>・3年間の教育実践研究の振り返り</li> <li>・自分の教科に関する授業や教職関係の授業(探求ネットワークやライフパートナーなど),さらにボランティア活動などで子どもたちとのふれあいの振り返り</li> </ul> <p>個人省察レポートの準備</p>
10月13日(金) 10:30~12:00 第1教室	<p>第2回「グループでの省察」(附属小・附属養護はクラス,附属中は前半が教科,後半がクラス)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人レポートをもとにグループで省察(附属中は教科,クラスともグループで振り返る)</li> </ul> <p>次回までの課題(4テーマを示し,どのテーマで自分の実践をまとめるか考える)</p>
10月27日(金) 10:30~12:00 第1教室	<p>附属学校の指導案,実習録の返却</p> <p>4つのテーマについてグループで考える(A授業・教材づくり,B学級・学校づくり,C子ども理解,D教師のありかた)(グループ:附属小・附属養護はクラス,附属中は教科)</p> <p>自分のレポートテーマを決定して提出。次回までに個人レポートを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人レポートは,A B C Dの4つの大きなテーマの中で,個別に独自テーマを考え,自分の学習・実践のプロセスを省察する。・独自テーマ・テーマ設定の理由・自分の実践の展開の省察(1年から3年まで)・まとめ</li> <li>・A 4サイズで枚数自由,各自5部印刷して持参すること。</li> </ul>
10月28日(土) 13:00~16:30 アカデミーホールおよび1号館	<p>教育実践センターの公開シンポジウムと教育懇談会に参加</p> <p>第1部 公開シンポジウム「理想の教師像を語る」</p> <p>第2部 客員教授との教育懇談会(指導力不足教員と指導力/協力的な学習指導のありかたを考える/簡単な科学工作で子どもとの距離を縮める/教師と子どもより良い人間関係づくりのために/一人ひとりのニーズに即した学校教育の進め方と教師に求められるもの/「心育て」の視点-臨床心理士の試み)</p>
11月1日(水) 10:30~12:00 第1教室	<p>10月31日から評価表を教務係で配布。</p> <p>4つのテーマで新しいグループに分かれ,レポートを読みあう。グループは小・中・養の混成グループ。レポート作成の過程で,教科教育・教科専門の教員の指導を受ける。</p>
11月10日(金) (同上)	<p>全体会では,附属の実習担当教員に実習に関する感想,コメントをいただく。</p> <p>4つのテーマで新しいグループに分かれ,練り上げたレポートを読みあう。グループごとに共同レポート作成に向けて準備する。(1.テーマ設定,2.テーマ設定の理由,3.テーマに基づいたそれぞれの実践の省察,4.まとめ)</p>
11月17日・24日 12月1日(金) (同上)	<p>共同レポートの作成</p>
12月8日(金) (同上)	<p>共同レポートの発表会</p> <p>附属学校の担当教員,実習校担当の大学教員,教科教育・教科専門教員の参観。</p> <p>最終レポートをe-ポートフォーリオに収録することを学生に指示する。</p>

(教育実践の省察と展望 平成 18 年度教育実践研究 報告書)



ライフパートナー（学校教育相談研究）では、学生が不登校児の家庭や相談室等に  
出向いて支援する活  
動を進め、悩みを抱える子どもを支える力を培うための実践研究を実現し、関係者から  
も高い評価を得ている【資料 1-2-6[1]：P13，資料 3-1-3，別添資料 1-2：P57】。

資料 3-1-3 ライフパートナー授業計画と学校担当者の評価

回数	日時	学校教育相談研究		学校教育相談研究（幼児理解）	
		内 容	担 当	内 容	会 議
1	10月3日	オリエンテーション	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
2	10月10日	講義 発達障害を考える1（中村）	中村	学校教育相談研究 と合同	
3	10月17日	ケースカンファレンス1（各自7-9月の経過報告と問題）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
4	10月24日	至民中学校の授業研究会への参加（見てみよう公立中学校）		学校教育相談研究 と合同	
5	10月31日	講義 発達障害を考える2（松木）	松木	講義 幼児理解1（岸野）	
6	11月7日	シンポジウム（ライフパートナーを考える）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
7	11月14日	月曜授業			
8	11月21日	講義 不登校と発達障害を抱える学校（淵本・上野）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	
9	11月28日	地域別・グループ別相談会（淵本・上野・岸野・中村）		講義 幼児理解2（岸野）	有
10	12月5日	講義 不登校と発達障害を考える（廣澤）		学校教育相談研究 と合同	有紹介
11	12月12日	ケースカンファレンス2と事例報告1（坂井部）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
12	12月19日	テレビ授業報告1（工学部）と事例報告2（福井市）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
13	1月9日	テレビ授業報告2（工学部）と事例報告3（丹南地区）	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
14	1月16日	テレビ授業報告3（工学部） レポート作成のための会議	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
15	1月23日	ケースカンファレンス3とレポートの書き方	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
16	1月30日	レポートの最終確認と提出	TA全員	学校教育相談研究 と合同	有
17	2月23日	ライフパートナー体験発表会		大学教授・特殊教育センター長・相談課長	有
18		午前 10時より12時まで 全体発表 大2講義室 コメント	午後 13時より16時まで 各市町別発表 11・12・13・14講義室		

注意：工学部学生は、学校教育相談研究を受講します。工学部学生はテレビ授業報告を行います。テレビ授業は前期・後期合わせて2回行います  
事例報告では、2名報告してもらいます。その後ケースカンファレンスを行います。

（平成19年度ライフパートナー活動報告書）

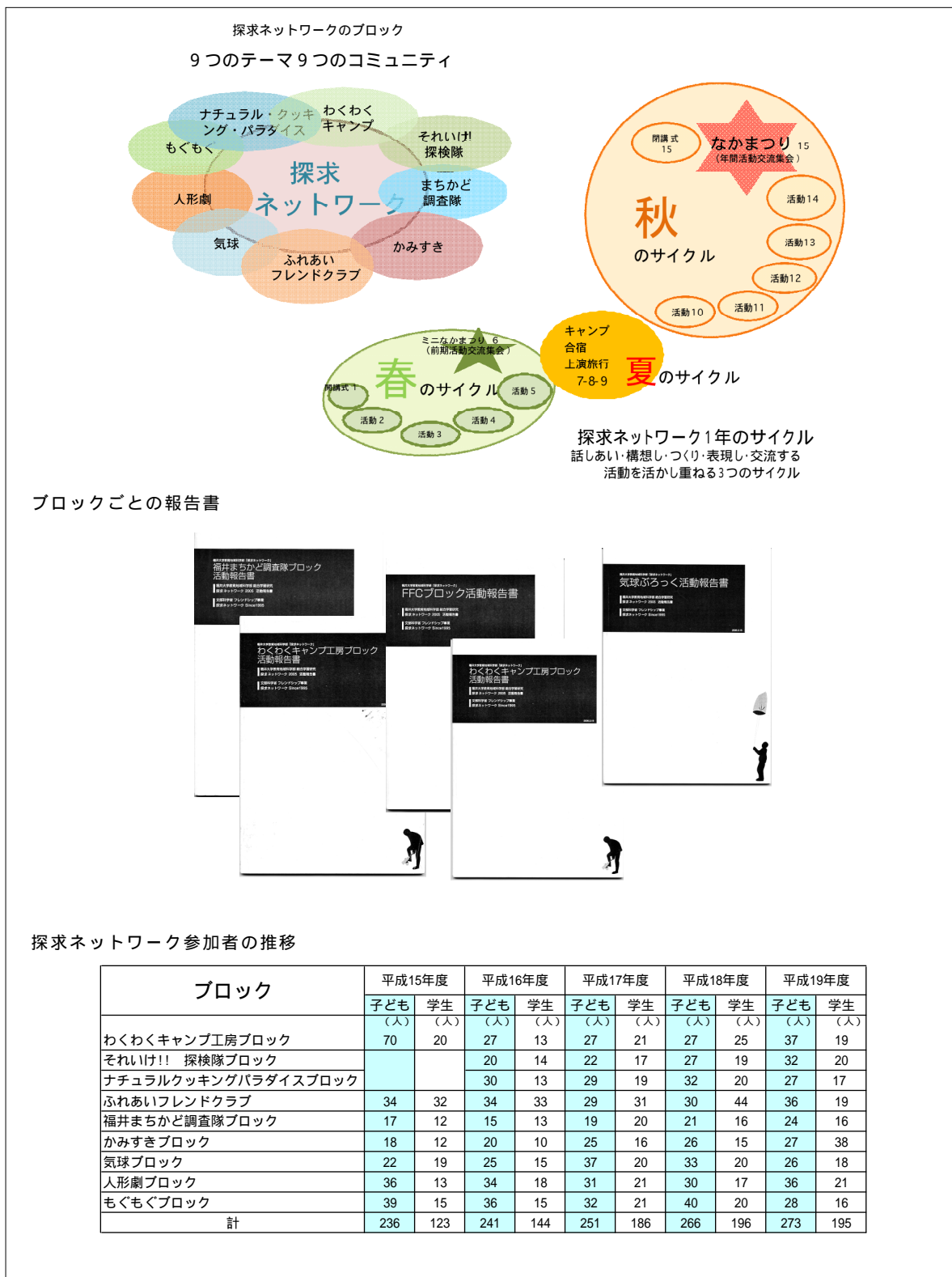
ライフパートナーに対する学校担当者の評価（受入れ教員の担当、学校種、当該児童・生徒がかかえる問題）

- コミュニケーション能力の不足が原因と思われる該当児童にとって登校を促さず、一緒に遊んだり活動してくれたりする大人として、ライフパートナーの存在は非常に大きかった。（担任、小学校、不登校）
- 相談室登校の児童たちなのでストレスが多く、その発散として、身体を動かすことを望んでおり、いつもその相手をしてもらっています。時には委員会活動を一緒にしてもらったり、時間を延長して相手になってくれたり感謝しています。（教員、小学校、不登校）
- 本人の話し相手になってくれたことが大変よかったように思う。担任に言えないことでも気軽に話せる場所があった。（担任、小学校、軽度発達障害）
- 当該児童の良さ（長所）を引き出したり気づいたりしてくださり、ありがたかったです。ゆっくりと優しく、当該児童のペースに合わせて支援してくださいました。（担任、小学校、軽度発達障害）
- 体調がすぐれず外出することが少ないため、母親以外の人と話す機会が少ない。そのため、年の近いライフパートナーの方と話す時間は大変有効であった。生徒の表情も大変やわらいでいたようである。（教育相談担当、中学校、不登校）
- 引きこもりがちになっている児童にとって外部の人とのコミュニケーションはよい刺激になったようだ。友人的な関係がよかったのだと思う。（担任、小学校、不登校）
- 不登校生をお願いしたところ、上手に対応していただき、業1回登校できるようになりました。学生ならではの対応で対象生徒の笑顔がたくさん見られました。ありがとうございました。（教育相談担当、中学校、不登校）
- 基礎的な内容をきちんと復習し、一つ一つ確認しながら学習を進めていただき、ご自分の専門分野の魅力を生徒に伝えてくださったと思います。（教育相談担当、中学校、学習上の問題）
- 当該生徒が病気で急に欠席した際、相談室の他の生徒7～8人を対象に、理科のある単元の内容について解き方を説明してくれたことが何回もありました。大変分かりやすく、上手に説明してくれたので、生徒たちは一生懸命2時間ぶっ通しで取り組んでいました。（教育相談担当、中学校、不登校）
- 最初は自宅からつれだす、適応教室へ、たまには単発的に行く学校への遅れ添いなど、担任の大きな手助けとなった。（適応教室指導教員、中学校、家庭の養育上の問題）
- 軽度発達障害により、教室に連応できない生徒の話し相手、体育的活動の相手として、とても助けになりました。（教育相談担当、中学校、軽度発達障害）
- 一緒に教室に入ってくれたり、個別に学習を見てくださったりして、大変助かりました。児童もその日を楽しみに待っていて、元気づけられるようでした。ありがとうございました。（教育相談担当、小学校、不登校）
- なかなかみんなと共に行動できない児童の支援にあたってもらったため、今までは担任がその子にかかりきりになってしまい、他の児童への指導が行き届かない面が多かったが、その問題点がずいぶん改善された。（担任、小学校、無回答）
- 担任とは違う視点から子どもを観察し、子どもの様子を伝えてくれたこと、1時間子どもに対応する中でよかったこと、悪かったことを含め、しっかり反省を話してくれたことがよかった。（担任、小学校、軽度発達障害）

（平成15年度特色G P「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト」実施報告書，平成19年3月）

探求ネットワーク（総合学習研究，学習過程研究）は学生が長期にわたり子どもたちの協働探求活動を支える取組であり，組織学習の力を培う実践的授業として成果を上げている【資料 1-2-6[2]：P 13，資料 3-1-4，資料 3-2-1：P38，別添資料 1-3：P58】。

資料 3-1-4 探求ネットワークの組織とサイクル

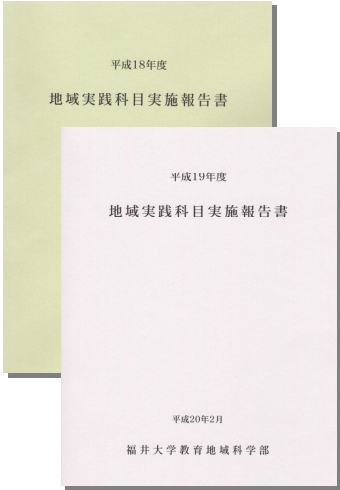


「教職総合演習」では多様な分野の教員ごとにチームを編成しテーマに即した共同研究を進め、成果を交流し報告書にまとめている【資料 2-1-6：P23】。

(地域 2 課程関係)

「地域実践科目」では児童館や国際交流施設等における活動に学生が参画し、企画運営する力を培う取組を進め、成果を報告書にまとめている【資料 3-1-5】。

資料 3-1-5 地域実践科目実施報告書



地域実践科目実施報告（平成19年度）

1. 生涯学習コース  
地域教育文化系：さつき児童館における実践研究  
「みんなで遊ぼう！ゲームフェスタ～あわてんぼうたちのクリスマス」
2. 異文化交流コース  
国際交流実習 「福井国際フェスティバル2007の企画運営に参加」  
受入れ先：財団法人 福井県国際交流協会
3. 行政社会コース  
行政・企業実地研修 ・行政・企業実地研修  
福井県庁・福井市役所・鯖江市役所・福井市選挙管理委員会等での実習報告
4. 地域環境コース  
福井県衛生環境センター・福井県農業試験場等での研修報告

**地域実践科目受講者の声**

地域教育文化実践研究 研修先：さつき児童館

1年の実習を通して私たちの考え方に変化があった。前期は自分たちで子どもたちを動かし、いかに楽しんでもらうかを議論していた。そのために「意識づけ」などという言葉を送り、あたかも実習生の言葉で子供達が力を身につけているような感じがしていた。しかしそれでは本来の目標の活動の支援ができない。支援するのは相手が自立する位でないといけないのだ。児童館実習は学習の場である。片方が教えるのではなくお互いに学んでいくのである。「意識づけ」など刷り込みと同じで、お互いの学び合いではない。後期では「意識づけ」を「提案」に変えることができたのが大きかった。子供達は提案されたテーマを生かして発展させていく。実習生はそれを具体化できるように提案したり、道具を用意したりして作品の完成をサポートしていくのである。

行政・企業等実地研修 研修先：日刊県民福井（新聞社）

研修の一番の成果は、どんな仕事、業務であれ、人とのコミュニケーションは重要だということを学んだことである。特に、日刊県民福井では、この「人」に該当するのは「福井県民」である。広告局ではクライアント、販売局では読者、編集局では地域の人。もちろん同じ職場の人とのコミュニケーションは欠かせない。それぞれの局は、業務は異なるにしても、県民とのコミュニケーションをとっている。人とのコミュニケーションをとっていく中で、人間関係が形成され、それはやがて強い信頼関係となっていく。そして、良い人間関係が形成されている職場環境であれば、良い仕事ができる。私達は、仕事をする上でのコミュニケーションの重要性に気づくことができた。足りないのは、コミュニケーション能力だと思う。今後、様々な人と接する機会は増えていく。様々な人と会話ができるようになるには、相手を知ること、自分を知ってもらうことはもちろんのこと、幅広く様々な経験をして吸収し、会話の引き出しなるものを形成することも大切だということを学んだ。

行政・企業等実地研修 研修先：福井市役所商工労働部マーケット戦略室

研修中に色々な職員さんと話すことができ、下を育てる責任、仕事のやりがいなどを教えてもらった。ある職員さんは「初めは誰だって何もできない。初めからできることは期待していない。だから一人前になった人につかかせて一つ一つ教えて一人前に育てていく。下ができなかったらそれは上の責任になる。だから責任を持って下を育てていくんだ。」とおっしゃっていて、サークルでもバイトでも私は責任を持って下の子のことを考えて指導してきただろうかと思ひ、私は自分のことしか考えていなかったと反省した。市民に対しても企業に対しても市の職員に対しても常に責任を持ち、親身になって対応することが重要であり、それがまた信頼を生み一体感をますのだと思った。この研修を通して、仕事だけではなく、気配りや責任ということを教えてもらった。これから自分の行動に責任を持ち、周りに気を配り、誰にでも何にでも親身に対応していきたいと思う。

（平成 19 年度地域実践科目実施報告書）

（次頁に続く）

資料 3-1-5(続き)

実習を終えてみてこれまでを振り返ってみると、実習生7人がそれぞれ自分の特性を活かして活動を行っていたことに気づいた。それは、特に話し合いの中や、後期になってからよく表れていた。話し合いでは、7人それぞれの役割のようなものが暗黙の了解でできていたように思う。話し合う題材を提案する人、それについて意見を言い合う人、話合っている内容について鋭い視点から意見を投げかける人、話し合いの記録をとる人。その時は意識せずに行っていたのだが、今振り返ると、それがうまくかみ合っていたから活動を展開させて行くことができたと思う。活動を進めて行く中で、みんなが無意識に自分の役割を認識して、動くことができるようになっていったのではないだろうか。

(生涯学習コース地域教育文化実践研究平成18年度報告書)

地域文化課程における博物館実習においては、博物館との協力体制のもと学生が企画展示を実際に行う実地の実習が工夫され、成果を上げている【資料3-1-6】。

資料 3-1-6 博物館実習報告書

平成18年度 博物館実習Report 目次

はじめに

平成18年度博物館実習..... 1

実習生の報告

1. 関西での博物館等研修..... 7

京都科学/京都府京都文化博物館/国立民族博物館

2. 福井県立歴史博物館での実習..... 9

「ブックアート」展の展示について/文化行政について/ミュージアムコンサート「蓄音機の音色」補助と「ブックアート」展ギャラリートーク 「ブックアート」展のワークショップ ブックカバーを作ろう!/美術工芸資料の取扱い/考古資料の取扱い/民族資料の実測・保存・修復/「ピーチグラスでランプを作ろう」ワークショップ

3. 大学内での取組..... 20

「世界リズムで遊ぼう」と公開講座/公開講座「博物館の最前線2006」

実習を終えて

実習生の個人レポート..... 23

活用してこそ/博物館の広報活動/博物館のあり方/実習を通して学んだこと/「見せる」側の立場に立ってみて/実習で学んだこと/実習を振り返る

協力機関一覧..... 30

実習生のレポート(抜粋)

実習を経て、学芸員という仕事について、私が思っていた以上にハードであるということを感じた。ひとつの企画展においても、資料の収集から展示の構想、チラシやポスターの構想、展示に対応したワークショップや講演の実施など、限られた時間内に多くのことをこなさなければならない。またこれらをこなすのにも、資料に関する専門の知識はもとより、ギャラリートークのような場面でそれを人前で分かりやすく解説すること、デザインやディスプレイに関する知識、ワークショップやイベントを企画、運営するなど幅広い知識や能力が求められるということを知った。さらに学芸員との関わりの中で、学芸員は単に博物館内で資料を研究・管理して見せるだけでなく、それらと地域を結ぶパイプ的存在であると感じた。(平成18年度博物館実習レポート、P28)

(平成18年度博物館実習 Report)

外国語教育を中心に少人数の科目を開講し、副専攻の設定により学生自身が自らの関心に基づいて系統的に教養科目について学ぶことを支援している【資料 2-1-9 : P25】。

教育課程の編成趣旨に沿った適切なシラバスが作成され、ウェブ上でシラバスが閲覧できるシステムを構築し、履修のための十分な情報が提供されている【資料 3-1-7】。

## 資料 3-1-7 シラバス例

<p>教育地域科学部&gt;学校教育課程&gt;教職科目</p> <p>授業科目名 体育教材研究 (Research on Teaching Materials in Physical Education)</p> <p>担当教員 吉澤 正尹, 宗倉 啓</p> <p>科目区分 教職科目</p> <p>開講時期 2年、3年、4年・後期</p> <p>単位数 2</p> <p>授業形態 講義・演習</p> <p>研究室 教育地域科学部 1号館</p> <p>E-mail <a href="mailto:ksokura@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp">ksokura@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp</a></p> <p>電話(内線) 0776-27-8706 (2482)</p> <p>基本キーワード 体育学習の目的 体育の教材づくり 身体運動の構造</p> <p>個別キーワード 体育学習指導要領の目的の変遷 学習者のつまずきと教材づくり 体育における教授-学習過程の組織化 身体運動の成り立ち 体育教材の系統的指導</p> <p>授業の目標 体育科教育の史的・原理的分野(宗倉担当)、運動構造の解析結果からみた指導法の検討(吉澤担当)について、両教員で分担し講義を行う。</p> <p>学科等の学習・教育目標との関連 これまで体験した「学習者としての身体運動の理解」にとどまらず、指導者の立場から体育教材の解釈、構造について考える。</p> <p>授業内容</p> <p>&lt;宗倉教員&gt;</p> <p>第1回 戦後学習指導要領の目的の変遷</p> <p>第2回 学習者のつまずきと教材づくり</p> <p>第3回 学習者のつまずきと教材づくり</p> <p>第4回 授業(教授-学習過程)の組織化</p> <p>第5回 授業(教授-学習過程)の組織化</p> <p>第6回 授業(教授-学習過程)の組織化</p> <p>第7回 宗倉担当分のテスト</p> <p>&lt;吉澤教員&gt;</p> <p>第1回 水泳運動における推進力と抵抗について</p> <p>第2回 鉄棒運動における位置エネルギーと回転エネルギーについて</p> <p>第3回 各自の苦手な運動課題の克服方法の構築と実践 - 1 -</p> <p>第4回 マット運動におけるバランスと回転について</p> <p>第5回 跳び箱運動における用具の特性と身体が発揮するバネについて</p> <p>第6回 スキー滑降における回転に必要な用具の特性と下肢関節動作について</p> <p>第7回 各自の苦手な運動課題の克服方法の構築と実践 - 2 -</p> <p>第8回 吉澤担当分のテスト</p> <p>授業方法 宗倉が前半7回、吉澤が後半8回の講義を分担し、上記の授業内容について学習する。</p> <p>学生の目標 指導者の立場から体育教材の解釈、構造ならびに体育教材と児童との関係について理解を深める。</p> <p>評価の方法 各時限の講義内容の理論的な整理ならびに小課題についてレポート、およびテストを総合し、両担当者が個別に評価する。</p> <p>教科書・参考書等</p> <p>&lt;宗倉&gt; 担当者の作成資料を用いる。</p> <p>&lt;吉澤&gt; 「小学校学習指導要領」、関連解説書ならびに担当者作成の資料など。</p> <p>その他、注意事項、オフィスアワー等</p> <p>&lt;吉澤&gt; オフィスアワー：月曜日5時限目</p> <p>&lt;宗倉&gt; オフィスアワー：水曜日2時限目</p>
--

(福井大学シラバス, 平成 19 年度ウェブ版)

## 観点 3-2 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

(学校教育課程関係)

ライフパートナーや探求ネットワークでは、子どもたちの活動に長期にわたって責任を持って関わり、子どもたちの成長に立ち会うことで、学生の主体的活動を促してい

る【資料 3-2-1】。また、探求ネットワークでは1年から4年までの学生が協力して活動の運営を行い、学生の組織的・自治的活動が実現している【資料 3-2-2】。

資料 3-2-1 探求ネットを通して学んだこと

・探求2年間を通して、大きく二つのことを学ばせてもらったと思う。それは、子どもたちと活動自体の可能性である。子どもたちの限界を私たちが決めてしまうのではなく、子どもたちから意見や考えを引き出すことが、よりよい活動を行うためにとても大切だと感じる。また人形劇を作る活動から、人形劇の質の向上だけでなく、子ども同士、子どもとスタッフとの関係から生まれる信頼関係や相互の学び合いも大切にしなければならぬと感じた。p.114

・最初、何もわからないまま探求ネットワークに参加して、子どもたちと関わり、活動をより良くしようと考えること、そして他の人たちと協力することなど様々なことを学んだ。やはり、活動では子どもたちと接して自分が行った行動を後悔することも多くあった。しかし、それは他のスタッフに相談することができ、活動を行っていく中で、それを埋めることができた。探求ネットワークの魅力は、子どもたちとの活動であることは間違いないが、失敗したことを他のスタッフに相談できること、そして活動に活かしていくことができることだと思う。p.154

・この3年間の活動を通し、子どもたちとの関わりだけでなく、スタッフ間での関わりや、ブロックとして、係として、3年生として活動を企画していく中で、子どもと共に活動を創り上げる姿勢や、ねらいに向かった活動の組み立てなど、学ぶものが沢山あった。また（通信係の）長という役割を経験したことで、スタッフ同士の連携、助け合いの中で全体の活動をサポートしていくという側面を肌で感じる事ができた。これほど多くのことを感じ、考えながら多くの人と関わりあって過ごすことができ、この活動に携わってきて本当によかったと感じる。p.216

（平成 19 年度探求ネットワーク報告書）

資料 3-2-2 探求ネットワークとは

探求ネットワークとは...『子どもたちと大学生が1年間、共同探求を行なっていくもの』です。

13年目の今年は、9つのプロジェクト（人形げき、気球、かみすき、もぐもぐ、探険隊、ナチュラルクッキングパラダイス、キャンプ工房、ふれあいフレンドクラブ、福井まちかど調査隊）で、探求活動を行なっています！！

<目的>

探求ネットワークとは、子どもたちと大学生が1年間、あるテーマのもとで共同探求を行なっていく活動です。

この探求ネットワークでは、「ひとつのテーマを通して、自分で考え、実行する力を養う」という目標を掲げて継続した活動をしています。その継続した活動を行なう中で、自分の中での反省や経験を次に生かしていく力をつけるというねらいを持っています。

共に試行錯誤しながら活動を展開していく探求ネットワークの活動は、子どもにもスタッフにも、大きな学びの場だと考えており、子どもたちとのかわりの中で、私たち大学生スタッフ自身も日々探求し、成長していきたいと願っています。

<年サイクル>

探求ネットワークの活動は、5月から12月まで、毎月第2・4土曜日に行なわれています。一年間の活動の中には、「春のサイクル」、「夏のサイクル」、「秋のサイクル」という3つのサイクルがあります。そして、そのサイクルごとの振り返り、発表の場を大切にしています。

まず、春のサイクルでは、春の活動の締めくくりとして、7月に「ミニなかまつり」という中間発表の場を設けています。ここでは、活動を振り返ったり、他のブロックとの交流を深めたりします。

次に、夏のサイクルでは、各ブロックは夏休みを利用してキャンプを行ない、そのまとめとして報告会をします。

そして、秋のサイクルの最後には、「なかまつり」という最終発表の場を設けています。ここでは、秋のサイクルを振り返ると共に、1年間の活動の成果を全体に向け発表します。例年、会場を附属小学校に移し、探求ネットワークの中だけでなく、一般のお客さんにも広く子どもたちの学習の成果を見ていただいています。

今年で探求ネットワークは12年目になります。その規模は年々拡大し、子ども・スタッフをあわせて、約470人になっています。

<9つのテーマ 9つの探求コミュニティ（ブロック）>

探求ネットワークには、テーマの異なる9つのブロックがあり、子どもたちはそのいずれかに所属し、1年間活動していきます。

- ・いくつかの劇団ごとに人形劇を制作し、発表する『人形げきブロック』。
- ・いろいろなスタイルの気球を作っていく『気球ブロック』。
- ・自分たちで計画し、アレンジを加えた料理を作っていく『もぐもぐブロック』。
- ・紙をすいたり、すいた紙で作品を作ったりする『かみすきブロック』。
- ・主に障害児を対象とし、遊びを通して人やものとのかわりを深めていく『ふれあいフレンドクラブ』。
- ・キャンプの中でもクラフトをメインとした『わくわくキャンプ工房ブロック』。
- ・野外での料理をメインとした『ナチュラルクッキングパラダイスブロック』。
- ・キャンプ場での探険をメインとする『それいけ!!探険隊ブロック』。
- ・そして、一昨年までの歴史たんけんブロックから、さらに地域に根ざした活動をということで生まれ変わり、福井県の各所を調査する『福井まちかど調査隊ブロック』。

以上の計9つのブロックがお互いに刺激しあいながら活動を展開しています。

（学生が運営しているHP、<http://edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp/~yanagi/syosai.html>）

「教職総合演習」では、少人数でのチームを多様な専門の教員が支え、チーム間で交流し刺激し合いながら協働して授業を展開することにより、主体的な取組を促すことに成果を上げている【資料 2-1-6：P23】。

(地域 2 課程関係)

「地域実践科目」では、学生自身が地域での学習・交流活動を企画運営し、その展開を検討会でプレゼンテーションしたり、「博物館実習」では、企画展示を行うなど、学生の主体的な学習を実現している【資料 3-1-5：P35】。

(全課程共通)

主要実践科目では、実践の記録と省察のレポートを課し、これを報告書として纏め公表するという取組を通して、授業時間以外の学習時間の確保及び単位の実質化を図っている【資料 1-2-5：P13，資料 2-1-6：P23，資料 3-1-5：P35，資料 3-1-6：P36】。

学生に対する指導体制として「助言教員」制度を設けている。学生は年度ごとに助言教員を選び、当該教員から適切な履修指導や大学生活に関する助言を受けている【資料 3-2-3】。

資料 3-2-3 助言教員に対する評価

アンケート項目 4 助言教員・指導教員は親身であった。  
( 強く思う。 そう思う。 どちらともいえない。 そう思わない。 まったく思わない。 )

選択番号 (評価)	学校教育課程			地域文化課程			地域社会課程		
	回答数	合計点	平均点	回答数	合計点	平均点	回答数	合計点	平均点
5	48	240	4.38	4	20	3.57	13	65	4.29
4	40	160		8	32		10	40	
3	4	12		5	15		5	15	
2	1	2		4	8		0	0	
1	2	2		0	0		0	0	
0	0	0		0	0		0	0	
計	95	416		21	75		28	120	

3課程の平均:4.24

(平成 18 年度学部卒業生・大学院修了者の達成度認識と満足度アンケート)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

中心となる科目(教育実践研究・地域実践科目)において、学生自身が主体的にプロジェクトを実践し、探究・省察・表現する多様な授業形態を実現して実践力形成に成果を上げ、学生からも高い評価を得ている<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 資料 2-1-4：教育実践研究の展開：P22

資料 3-1-5：地域実践科目実施報告書：P35

資料 4-2-3：学生の省察レポート：P47

ライフパートナー・探求ネットワークは、地域に根ざした実践力形成の取組として平成 15～18 年度文科省特色 G P に採択され教師教育改革の動きの中で高い評価を得るとともに、全国の教育関係者や地域の学校関係者から高い評価を得ている<sup>2)</sup>。

- 2) 資料 2-1-5 : ライフパートナーと探求ネットワーク活動 : P22
- 資料 3-1-3 : ライフパートナー授業計画と学校担当者の評価 : P33
- 資料 3-1-4 : 探求ネットワークの組織とサイクル : P34
- 別添資料 1-2 : ライフパートナー事業の概要 : P57

共通教育科目は、少人数授業や学生自身の関心に即した副専攻の設定等により、文科省の平成 17 年度特色 G P に採択され高い評価を得ている<sup>3)</sup>。

- 3) 資料 2-1-9 : 平成 17 年度特色 G P の概要 : P25



分析項目 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 4-1 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

学校教育課程では、「教育実践研究 ～ 」「ライフパートナー」「探求ネットワーク」「教職総合演習」の授業において、いずれも自らの体験を省察して毎年充実した報告書を作成している。これらは学生が十分な省察的実践力を身に付けたことを示すものである【資料 1-2-5 : P13, 資料 1-2-6 [1] : P13, 資料 1-2-6 [2] : P13, 資料 2-1-6 : P23, 資料 3-2-1 : P38, 資料 4-1-8 : P45, 資料 4-2-3 : P47】。

地域 2 課程では、博物館学芸員とのコラボレーション、県国際フェスティバルの企画・運営への参加、行政・企業等での実地研修等の成果を報告書に纏める活動を毎年実施している。これは学生が十分な地域協働の現実感覚と実践力を身に付けたことを示すものである【資料 2-1-8 : P25, 資料 3-1-5 : P35, 資料 3-1-6 : P36, 資料 4-1-2】。

資料 4-1-2 地域実践科目実施スケジュール(平成 18 年度前期の例)

月	生涯学習コース	異文化交流コース	行政社会コース	地域環境コース
4月	4月～7月(A) さつき児童館における実践。企画、省察、次の展開についての演習	5日・6日「ボランティア」ボランティア活動に関する事前学習と福井市ボランティアセンターでの打合せ 毎週木曜「ボランティア」福井市民福祉会館で聴覚障害に関する勉強会とレクリエーションへの参加 毎週土曜「ボランティア」手話の学習	「行政・企業等実地研修Ⅰ」  14日 ガイダンス	28日 実地研修説明会 * 研修先・研修内容の説明と資料配布 * 研修先に関する学生希望聴取
5月	16日 さつき児童館での実践前期①(A)	毎週木曜「ボランティア」福井市民福祉会館で聴覚障害に関する勉強会とレクリエーションへの参加 毎週土曜「ボランティア」手話の学習	12日 ゲスト講演「生活者起点の行政をめざして」米村輝子氏(福井県女性議員の会 代表) 12日 インターンシップ説明会 19日 ゲスト講演「地域の輝く主役たち」辻きぬ氏(ふくい生活と婦人問題研究会 代表) 26日 研修先希望調査票配布 30日 研修希望について個別面接 31日 研修先決定、掲示	5月～6月 * 派遣先の決定 * 学生への通知 * 研修先ごとの学生指導開始
6月	20日 さつき児童館での実践前期②(A)	9日「国際交流Ⅰ」第1回連絡会 25日「国際交流Ⅰ」企画運営委員会に参加 27日「国際交流Ⅰ」国際交流会館への挨拶 毎週木曜「ボランティア」福井市民福祉会館で聴覚障害に関する勉強会とレクリエーションへの参加 毎週土曜「ボランティア」手話の学習  *「ボランティア」ボランティア団体「かめさん」の機関紙作成	2日 ゲスト講演「福井市職員として思うこと」佐藤弘幸氏(福井市役所保育児童課)  * 研修先への挨拶、事前学習の開始	6月～7月 * 研修先の訪問・挨拶と日程の調整 * 研修先に関する事前学習
7月	7日～9日9日の金曜日 人間健康系個別実習 福仁会病院 11日 さつき児童館での実践前期③(A) 前期実習レポートの作成(A)	7日「国際交流Ⅰ」第2回連絡会 7日「国際交流Ⅱ」説明会 9日「国際交流Ⅰ」企画運営委員会に参加 21日「国際交流Ⅰ」記録・発表機材の説明会 23日「国際交流Ⅰ」企画運営委員会に参加 毎週木曜「ボランティア」福井市民福祉会館で聴覚障害に関する勉強会とレクリエーションへの参加 毎週土曜「ボランティア」手話の学習  *「国際交流Ⅱ」提携派遣先への訪問・挨拶と日程調整	* 研修先への挨拶、事前学習の開始  21日 ビジネスマナー講座 林憲治氏 (日華化学監査室長) 31日 事前学習レポート提出	14日 実地研修事前説明会 * 研修手順と心得の説明 * 実地研修録等の配布  同日 Eポートフォリオ実習(使い方説明会)

(平成 18 年度地域実践科目実施報告書)

毎年 20 人前後の学生を語学研修並びに交換留学で欧米やアジアの大学に派遣している【資料 2-2-6 : P29】。また、多数の学生達が県内外の芸術関係の様々な催しにおいて受賞している。これは学生が意欲的に自らの資質・能力の向上に取組み、かつ十分にその成果を上げていることを示すものである【資料 4-1-3 : P42】。

資料 4-1-3 芸術系コンクール等での受賞者

<p><b>【音楽関係】</b></p>	
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第56回福井県音楽コンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>声楽部門 大学一般の部 福井県教育委員会賞（10年度入学生 / 大森靖子）</li> </ul> </li> <li>第56回福井県音楽コンクール ピアノ部門 大学一般の部 奨励賞（15年度入学生 / 森安理恵）</li> <li>日本クラシックコンクール 声楽部門大学一般の部 福井地区予選通過 本選入選（16年度入学生 / 井上裕美子）</li> <li>全日本学生音楽コンクール 声楽部門大学の部 大阪大会 入選（16年度入学生 / 井上裕美子）</li> <li>日本ピアノ教育連盟ピアノオーディション北陸予選 奨励賞（16年度入学生 / 加藤俊裕）</li> <li>日本ピアノ教育連盟ピアノオーディション全国大会 入選（13年度入学生 / 山崎佑太）</li> <li>第28回 福井県新人演奏会オーディション 合格（13年度入学生 / 福塚香織・三室友美）</li> <li>松任市創作童謡・童謡作品集「ボコリンの唄」優秀賞 CDレコーディング（16年度入学生 / 岡田健志）</li> </ul>
平成17年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第57回福井県音楽コンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>声楽部門 大学一般の部 福井県知事賞（14年度入学生 / 定池公恵）</li> <li>ピアノ部門 大学一般の部 奨励賞（15年度入学生 / 森安理恵子）</li> <li>福井県文化協議会賞（16年度入学生 / 加藤俊裕山崎佑太）</li> <li>福井県知事賞（16年度入学生 / 山崎佑太）</li> </ul> </li> <li>P T N A ピアノコンペティション グラン・ミュージック部門 Dカテゴリ全国決勝大会 入選（14年度入学生 / 松宮利佳）</li> <li>第29回福井県新人演奏会オーディション 合格（14年度入学生 / 松宮利佳）</li> <li>第53回全日本吹奏楽コンクール福井県大会 銀賞（16年度入学生 / 岡田健志）</li> </ul>
平成18年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第58回福井県音楽コンクール ピアノ部門 大学一般の部 福井県文化協議会賞（17年度入学生 / 片口佳与）</li> <li>中部ショパン学生ピアノコンクール 北陸予選通過 本選出場（16年度入学生 / 加藤俊裕）</li> <li>第30回福井県新人演奏会オーディション 合格（15年度入学生 / 鈴木沙織・16年度入学生 / 加藤俊裕）</li> <li>第54回全日本吹奏楽コンクール 福井県大会 金賞（代表）（16年度入学生 / 岡田健志）</li> <li>第54回全日本吹奏楽コンクール 北陸大会 金賞（16年度入学生 / 岡田健志）</li> </ul>
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第9回「万里の長城杯」国際ピアノコンクール ピアノ一般の部 A 優秀賞（14年度入学生 / 久保田涼子）</li> <li>長江杯国際音楽コンクール 声楽 一般の部 3位（1位なし）（16年度入学生 / 井上裕美子）</li> <li>第59回福井県音楽コンクール ピアノ部門 大学一般の部 奨励賞（18年度入学生 / 北川愛実・19年度入学生 / 永田恭子）</li> <li>日本クラシック音楽コンクール 声楽部門 大学一般の部 福井地区予選通過 本選出場（19年度入学生 / 山田紗佑里）</li> <li>第28回北信越国民体育大会総合開会式「福井県民歌」独唱（16年度入学生 / 岡田健志）</li> <li>「テラル高原」CMソング・レコーディング（16年度入学生 / 岡田健志）</li> </ul>
<p><b>【美術関係】</b></p>	
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第30回福井県デザインコンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>グランプリ（02卒業生 / 河辺亜紀）</li> <li>福井県デザイナー協会賞（3年 / 藤野恭子）</li> <li>福井新聞社賞（03卒業生 / 加納桂子）</li> <li>福井県デザイナー協会奨励賞（3年 / 佐々木真由）</li> <li>福井テレビ賞（4年 / 西部佳枝）</li> <li>福井県デザイナー協会佳作（4年 / 竹内ちひろ）</li> <li>FBC福井放送賞（3年 / 別司祐輔）</li> <li>福井県デザイナー協会佳作（2年 / 渋谷知歩）</li> </ul> </li> <li>サムホール美術展                             <ul style="list-style-type: none"> <li>イザワ画房賞（3年 / 別司祐輔）</li> </ul> </li> </ul>
平成17年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第31回福井県デザインコンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>グランプリ（3年 / 山本ふみえ）</li> <li>福井県デザイナー協会賞（4年 / 中村公一）</li> <li>福井県文化協議会賞（4年 / 古木克彦）</li> <li>FM福井賞（院1 / 竹内ちひろ）</li> <li>FBC福井放送賞（院1 / 別司祐輔・武井文）</li> </ul> </li> </ul>
平成18年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第32回福井県デザインコンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>グランプリ（3年 / 住田薫）</li> <li>福井県デザイナー協会賞（3年 / 岡本達哉）</li> <li>FM福井賞（3年 / 西尾明子）</li> <li>福井県文化協議会賞（院1 / 竹内ちひろ）</li> <li>福井県デザイナー協会奨励賞（3年 / 岡本達哉）</li> </ul> </li> <li>県美展                             <ul style="list-style-type: none"> <li>デザイン部門知事賞（4年 / 住田薫）</li> </ul> </li> <li>福井市美展                             <ul style="list-style-type: none"> <li>市文化協会会長賞（彫刻部門 3年 / 岡本達哉）</li> <li>入選（工芸部門 3年 / 岡本達哉）</li> <li>入選×2（彫刻部門 3年 / 橋本郁也）</li> <li>福井テレビ賞（絵画造形部門 院1 / 稲葉寛乃）</li> </ul> </li> <li>第2回おいしい笑顔写真コンテスト                             <ul style="list-style-type: none"> <li>グランプリ（3年 / 岡本達哉）</li> <li>スポンサー賞（4年 / 武井文・3年 / 西尾明子）</li> <li>福井新聞社賞（2年 / 川井優美絵・橋本智恵）</li> </ul> </li> <li>カラーコーディネーター検定ポスターコンテスト                             <ul style="list-style-type: none"> <li>学生特別賞（2年 / 川井優美絵）</li> </ul> </li> <li>敦賀市美展                             <ul style="list-style-type: none"> <li>入賞（1年 / 松見和明）</li> </ul> </li> <li>「第五回あさご芸術の森大賞展」                             <ul style="list-style-type: none"> <li>入選（院1 稲葉寛乃）</li> </ul> </li> </ul>
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第33回福井県デザインコンクール                             <ul style="list-style-type: none"> <li>グランプリ（3年 / 中内亜由美）</li> <li>福井県文化協議会賞（3年 / 橋本智恵）</li> <li>福井新聞社賞（2年 / 辻敦子）</li> <li>ふくい産業支援センター賞（3年 / 川越あひ美）</li> <li>FM福井賞（院1 / 竹内ちひろ）</li> <li>FBC福井放送賞（2年 / 重野加南子）</li> <li>福井テレビ賞（3年 / 久野弘二）</li> <li>月刊ウララ賞（4年 / 木下恵理）</li> <li>福井ケーブルテレビ賞（3年 / 川井優美絵）</li> <li>全国植樹祭シンボルマーク公募                                     <ul style="list-style-type: none"> <li>優秀賞（4年 / 西尾明子）</li> </ul> </li> <li>「トーキョーワンダーウォール公募2007」                                     <ul style="list-style-type: none"> <li>立体・インスタレーション部門一次審査選出（院2 / 稲葉寛乃）</li> </ul> </li> <li>下北沢 舞台「アンチリアル」舞台美術作品コンペ                                     <ul style="list-style-type: none"> <li>入選（院1 / 武井文）</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>
<p><b>【書道関係】</b></p>	
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第9回全日本高校大学生書道展                             <ul style="list-style-type: none"> <li>書道展賞（原季衣 / 林裕子 院） 優秀賞（藤江ゆかり 院）</li> </ul> </li> </ul>
平成17年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第69回県かきぞめ読書大会                             <ul style="list-style-type: none"> <li>知事賞（小坂由佳） 若越書道会賞（村田憲治） 福井新聞社賞（藤江ゆかり 院）</li> <li>準推薦（大村六寿美 / 林裕子 院）</li> </ul> </li> </ul>
平成18年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第23回読書法展 入選（藤江ゆかり 院）</li> <li>第11回全日本高校大学生書道展 書道展賞（藤江ゆかり 院） 優秀賞（藤倉優希 / 堤秀章）</li> </ul>
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> <li>第71回県かきぞめ読書大会                             <ul style="list-style-type: none"> <li>知事賞（林信一） 大賞（山内佳芳里） 若越書道会賞（林裕子 院） 推薦（藤江ゆかり 院）</li> <li>準推薦（村田憲治 / 廣川咲佳 / 稲倉佑真）</li> </ul> </li> </ul>

（基礎資料）

1～4年生の単位修得率は、平成16～19年の3年間、教科専門科目においては91～92%、教職科目においては88～95%を示し、履修学生のうち83～90%が「優」または「良」と判定されている。これは各学年・科目で十分な学力や資質・能力を身に付けたことを示すものである【資料4-1-4】。

資料4-1-4 単位修得状況・成績修得状況表

年度	課程	専門教育科目																	
		教科・専門科目									教職科目								
		授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績					単位修得率	授業科目数	履修学生数	単位修得者数	成績					単位修得率
優	良				可	不可	保留	優	良					可	不可	保留			
平成16年度	学校教育課程	440	4846	4524	3216	972	336	322	0	93%	113	3948	3732	2996	568	168	211	5	95%
	地域文化課程	123	1480	1357	974	267	116	122	1	92%									
	地域社会課程	135	1556	1371	894	314	163	184	1	88%									
	合計	698	7882	7252	5084	1553	615	628	2	92%	113	3948	3732	2996	568	168	211	5	95%
平成17年度	学校教育課程	419	4701	4292	2959	1047	286	409	0	91%	109	3876	3574	2740	594	240	298	4	92%
	地域文化課程	139	1596	1441	1046	290	105	152	3	90%									
	地域社会課程	131	1490	1347	971	264	112	141	2	90%									
	合計	689	7787	7080	4976	1601	503	702	5	91%	109	3876	3574	2740	594	240	298	4	92%
平成18年度	学校教育課程	419	4752	4315	3034	1009	272	420	17	91%	112	3676	3243	2553	533	157	314	119	88%
	地域文化課程	125	1539	1440	1037	287	116	96	3	94%									
	地域社会課程	131	1355	1254	962	222	70	98	3	93%									
	合計	675	7646	7009	5033	1518	458	614	23	92%	112	3676	3243	2553	533	157	314	119	88%
平成19年度	学校教育課程	434	4790	4285	3079	861	345	440	65	89%	100	3660	3290	2481	667	142	293	77	90%
	地域文化課程	114	1474	1343	969	250	124	120	11	91%									
	地域社会課程	125	1415	1326	1021	225	80	87	2	94%									
	合計	673	7679	6954	5069	1336	549	647	78	91%	100	3660	3290	2481	667	142	293	77	90%

(基礎資料)

卒業時の資格取得状況については、平成16年～19年度の学校教育課程卒業生425名【資料4-1-6:P44】中、教員一種免許取得者は延べ1,312名、学校図書館司書教諭免許取得者は延べ47名となっている。なお、福井県では小中高教員の一括採用を行っていることもあり、多くの学生が3種類の一種免許を取得している。一方、地域文化課程卒業生総数126名中、社会教育主事資格取得者は延べ33名(残り1名は地域社会課程卒業生)、学芸員資格取得者は延べ27名(残り6名は、学校教育課程卒業生2名・地域社会課程卒業生4名)となっている。これらは学生が卒業時点で十分な学力や資質・能力を身に付けたことを示すものである【資料4-1-5】。

資料4-1-5 教員免許・各種資格取得状況表

取得免許(学校教育課程)

教員免許種類	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成16～19年度合計	
	二種	一種	二種	一種	二種	一種	二種	一種	二種	一種
幼稚園	0	18	0	27	0	19	1	20	1	84
小学校	10	94	7	98	10	93	6	91	33	376
中学校	6	97	7	104	9	97	3	94	24	392
高等学校	0	98	0	98	0	94	0	103	0	393
特別支援学校(養護学校)	3	13	2	18	7	19	1	17	1	67
計	19	320	16	345	26	322	10	325	58	1312

各種資格	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成16～19年度合計
学校図書館司書教諭	12(学12)	9(学9)	4(学4)	22(学22)	47(学47)
社会教育主事	10(文10)	9(文9)	5(文5)	10(文9,社1)	34(文33,社1)
学芸員	10(学1,文9)	6(文5,社1)	7(学1,文4,社2)	10(文9,社1)	33(学2,文27,社4)

学：学校教育課程，文：地域文化課程，社：地域社会課程

(基礎資料)

卒業認定基準に基づき、平成16～19年度は86～90%の学生が4年で卒業している。学部卒業者の「達成度認識と満足度」が5点満点の平均点3.66という数値を含め、これは卒業に至る過程において十分な学力や資質・能力を身に付けてきたことを示すものである【資料4-1-6、資料4-2-1：P46】。

資料4-1-6 卒業状況

	卒業認定者数					未定者数				
	教育地域科学部			教育学部		教育地域科学部			教育学部	
	学校教育課程	地域文化課程	地域社会課程	小学校教員養成課程	情報社会文化課程	学校教育課程	地域文化課程	地域社会課程	小学校教員養成課程	情報社会文化課程
平成16年度	109	28	33			15	10	2	1	1
平成17年度	109	39	30		1	13	5	2		
平成18年度	109	31	29			11	3	4		
平成19年度	98	28	29			16	4	2		

(基礎資料)

卒業直前の4年生全員を対象に行われた共通教育に関するアンケートで、「共通教育はどのように役立ちましたか」という問いに対するベスト3は、「なんとなく知識が広がった」、「幅広い視野や考え方が身についた」、「身の回りの社会に対する関心が高まった」である。これは学生が共通教育の授業において相応の知識や認識力を身に付けたことを示すものである【資料4-1-7】。

資料4-1-7 共通教育に関するアンケート結果(教育地域科学部4年生)

<p>問24 現時点で振り返ってみて、あなたにとって共通教育はどのように役立ちましたか〔複数回答可〕。 (教育地域科学部4年生の回答)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 なんとなく知識が広がった(61.9%)</li> <li>2 他分野の友人を得ることができた(6.5%)</li> <li>3 専門科目を理解し深めるのに役立った(9.4%)</li> <li>4 幅広い視野や考え方が身についた(25.3%)</li> <li>5 身の回りの社会に対する関心が高まった(19.0%)</li> <li>6 進路や生き方を考える上で役立った(4.5%)</li> <li>7 とくに役立ったことはない(12.5%)</li> <li>8 わからない(4.5%)</li> <li>9 その他(0.6%)</li> </ol>
---

(福井大学共通教育に関するアンケート調査[文京キャンパス4年生用])

正規教員として採用された者に対する聞き取り調査【資料4-1-8：P45】や、2名以上採用の県内企業10社を対象にした調査【資料4-1-9：P45】の結果からは、いずれも関係者からの高い評価を示している。これは卒業生が育成すべき人物像に求められる能力・資質・学力を身に付けたことを証すものである。

資料 4-1-8 現役正規採用教員に関する勤務先同僚及び本人への聞き取り調査

2-1 11月20日 敦賀市 A 小学校

<平成18年度卒業生 A さん (理科) >

探求ネットワーク、ライフパートナー、教育実習など、子どもたちとたくさん触れ合える場があったことがよかった。現場の子どもの様子だけでなく先生方の様子も分かるとよいと思う。例えば、実習のようになるが一定期間先生につくとか、附属だけではなく違うところの研究大会に行つて何か一つ発言して帰るなどすれば先生のことが見ることができのでは？見ることで、ビジョンがもてるのではないかと思う。小学校に赴任して、研究会、公開授業がたくさんあり、とてもためになったのでたくさんの授業を見たほうがよいと思った。

2-3 11月21日 南越前町 C 小学校

<平成16年度卒業生 C さん (国語) >

教師になってから今までの3年間のなかで、1年目は大変だった。授業はなんとかあったが、それ以外のことで「何も知らない」と実感する場面が多くあった。そういえばこの3年間は探求ネットワークに似ている。教師1年目は、何もわからずただやっていく感じだが、2年目になると1年間の流れがわかってきて、3年目になると学校全体の大きい役割を任せられるようになる。年毎に役割が変化していくということが、探求ネットワークと似ている。

2-5 11月27日 あわら市 E 小学校

<平成17年度卒業生 E さん (国語) >

自分自身が大切にしていることは、時間の許す限り、子どもの言いたいことに耳を傾けるということ。大きい学校だから、全ての子どもに目が行き届くわけではないし、話せるわけではない。しかし、できる限り多くの子どもの話を聞いてあげたい。その子にとって先生と話すことがそれほど重要でないこともあるかもしれないが、先生と話すその時間をずっと待っていた子もいるかもしれない。それぞれがいろいろな思いを抱えていて、それを上手に口に出せる子もいれば、なかなか上手く言えない子もいる。だからこそ、その子に合わせた聴き方で聴くよう心がけている。ライフパートナーの経験が役立っている。

<教務主任の先生 >

最近では特別支援が必要な子どもも増えているので、その対応の仕方など、そういうことも経験してくるといい。講師としても経験できるので、とにかく実際のなことを身に付けてほしい。その意味では学生のと看、ライフパートナーなどの経験をしているのは貴重だと思う。

(現役正規採用教員に関する勤務先同僚及び本人への聞き取り調査報告書、平成19年12月)

資料 4-1-9 企業側からみた卒業生の評価

地域2課程から採用した学生の印象は

A社	個性豊かであり、バラエティに富む。
B社	まじめでおとなしい。 コミュニケーションを大切にする。
C社	貴重な人材。 就職後資格を取るので時間がかかる。
D社	前向きに業務に取り組んでいる。 周囲のメンバーとコミュニケーションが図られている。
E社	何事にもまじめに取組む姿勢があり、模範となっている。
G社	能力は高く、勤務態度は良い。
H社	まじめに仕事に取り組んでいる。 自己主張がある(良い面)。
I社	コミュニケーション能力が高い。

地域2課程の卒業生を2名以上採用している企業10社を対象にアンケートを行った(平成17年10月調査)。この項目について8社から回答が得られた。

(外部評価のための資料、平成19年)

観点 4-2 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

平成18年度学部卒業生・大学院修了者の達成度認識と満足度アンケート報告書で、「学業の面で、自己のめざしていたものを基本的に達成できましたか」という問いに対し、5点満点の平均点は3.69という結果が出ている【資料4-2-1】。また、平成17年・18年度授業評価実施報告書によれば、「授業で新しい考え方(や知識,技能)が習得できたか」という問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」が「講義」に関しては74.6%、「演習・実験・実習及び実技」に関しては93.5%という結果が出ている。これらは学生が学業の成果に対して満足していることを示すものである【資料4-2-2】。

資料 4-2-1 学部卒業生の達成度認識と満足度

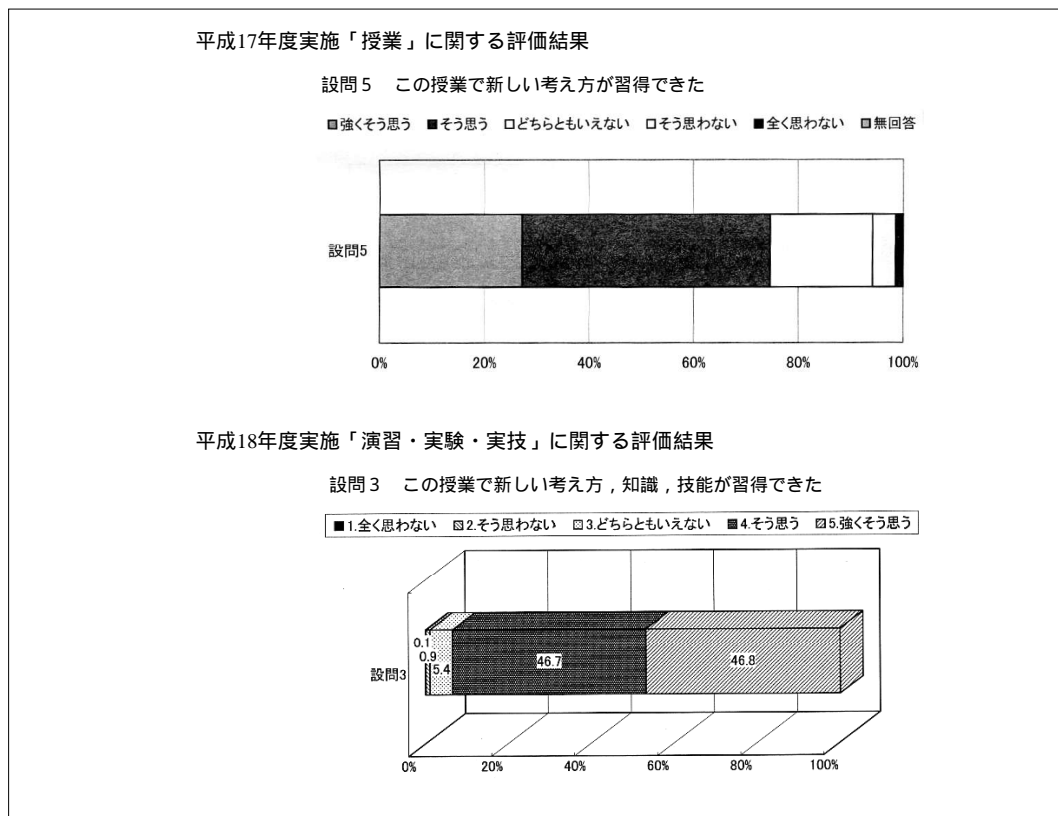
アンケート項目2 学業の面で、自己のめざしていたものを基本的に達成できた。  
( 強くそう思う。 そう思う。 どちらともいえない。 そう思わない。 まったく思わない。 )

選択番号 (評価点)	学校教育課程			地域社会課程			地域文化課程		
	回答数	合計点	平均点	回答数	合計点	平均点	回答数	合計点	平均点
5	15	75	3.81 *358/94人	3	15	3.52	0	0	3.39
4	52	208		8	32		14	56	
3	22	66		7	21		11	33	
2	4	8		3	6		3	6	
1	1	1		0	0			0	
0	1			0					
計	95	358		21	74		28	95	

3課程の平均点 3.69 (527/143)

(平成18年度学部卒業生・大学院修了者の達成度認識と満足度アンケート報告書より)

資料 4-2-2 「講義」、「演習・実験・実習および実技」に関する評価



(平成17年度,平成18年度授業評価実施報告書)

学校教育課程では、「教育実践研究 ～ 」の導入や「教職総合演習」の授業，更には「地域と協働した実践的な教育プロジェクト」によって，学生の課題探求能力・コミュニケーション能力，ひいては教員としての資質・能力の形成が促された。これらの取組は学生から高く評価されている【資料 4-2-3，資料 2-1-6：P23，資料 3-2-1：P38】。

資料 4-2-3 学生の省察レポート

教育実践研究 省察レポート

3年間を通して，私は普段経験できないような場を沢山与えられ，とても意義のある活動を積み重ねてきた。探求ネットワークでは，子どもの主体性を重視した教師の在り方を，ライフパートナーでは，教師と子どもの信頼関係の脆さと，その重要さを感じた。そして，何より，教育実習では，ベテランの先生方の指導観に触れながら，教師の熱意の大切さを学んだ。そして，熱意を持って子どもに向かっていけば，子どもにきちんと伝わり，受け入れてくれるのだという事を，自らの行動で実感する事ができた。

(出典：平成18年度 教育実践の省察と展望「教育実践研究」報告書)

教育実習では私は6年生のクラスに入りました。今回この実習を通して子どもを理解するということはとても大切だということがわかりました。実習に行くまではいかに子どもたちがおもしろいと思う授業をするかということを中心に考えていました。しかし、実習を終えた今では、子どもが授業中にいったいどのような考えを持ち、何を学んだかということのほうが大切なのではないかと思うようになりました。つまり実習に行くまでは教師がいかにうまく授業を進めるかという教師中心の考えだったが、実習を終えてからは、子どもがどのように考えているかといったような子ども中心の考えになりました。

(出典：平成19年度 教育実践の省察と展望「教育実践研究」報告書)

探求ネットワークについて

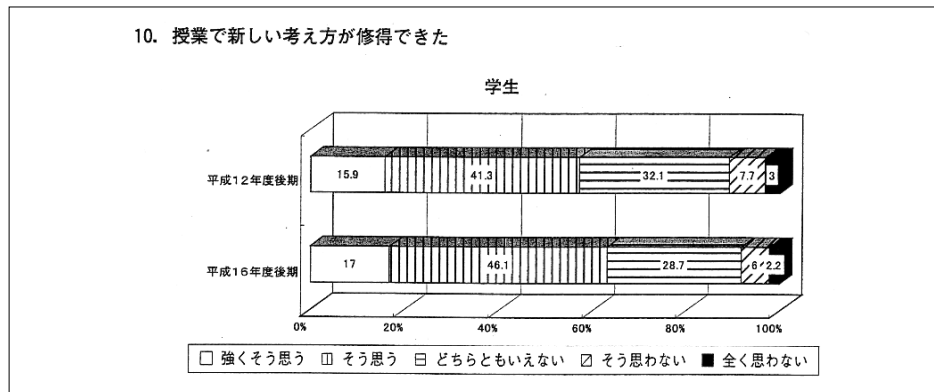
6年前、子どもたちと共に1年間継続した活動をつくる「探求ネットワーク」という活動に惹かれて、仙台より福井大学に進学しました。(中略)探求ネットワークの特長の1つに、子どももスタッフも、前年度より継続して参加している「経験者」と初加者が入り混じって活動していることがあります。年度を越えて子どもたちとつきあう経験などなかった私にとって、参加2年目の子どもたちの変容は衝撃でした。(中略)経験を重ねる中でだんだんと自信をつけていくこと、考えを構築していくことは、大人も子どもも同じなのだと実感しました。私が1年生だったときはスタッフ総勢50名足らずだった探求ネットワークも、今や140名のスタッフを抱える大所帯となりました。(中略)福井大学にいられるあと数ヶ月間、後輩の悩みに耳を傾け、陰ながら応援していくことで恩返しができたらと思っています。

(出典：平成18年度教育地域科学部同窓会会報「福応会報」第24号)

地域2課程では、「実地研修」の積極的な導入によって学生の地域社会に対する認識能力や実践感覚の形成が促された。これらの取組は学生から高く評価されている【資料 3-1-5：P35】。

平成16年度共通教育に関する後期授業アンケート調査報告書で「授業で新しい考え方が修得できたか」という問いに対し、「強くそう思う」「そう思う」が63.1%(平成12年度調査では57.2%)という結果が出ている。これらは学生が学業の成果に対して満足していることを示すものである【資料 4-2-4：P48】。

資料 4-2-4 共通教養・副専攻科目に対する評価



(平成16年度共通教育に関する後期授業アンケート調査報告書より)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

各種の実施報告書に記載された学生たちの省察レポートの内容は、課題探究能力・コミュニケーション能力・協働実践力のみならず、彼らの大きな達成感を物語っており、本学部における実践的な教育が十分な成果を上げ、学生の期待に十分に答えていることを示している<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 資料 3-1-5：地域実践科目実施報告書：P35

資料 3-2-1：探究ネットを通して学んだこと：P38

資料 4-2-3：学生の省察レポート：P47

高いレベルで達成された教員免許状並びに各種資格の取得状況と卒業状況は、学生の4年間の過程における学問的精進と、卒業時点における学力や資質・能力が十分に修得されたことを示すものであり、本学部における教育は学生の期待に答えて十分な成果を上げている<sup>2)</sup>。

<sup>2)</sup> 資料 4-1-5：教員免許・各種資格取得状況表：P43，

資料 4-1-6：卒業状況：P44

在校生や卒業生に対するアンケート結果に鑑み、学生は学業の成果に十分満足し、また、卒業時点で学生は十分な学力や資質・能力を身に付けており、関係者の期待に十分答えている<sup>3)</sup>。

<sup>3)</sup> 資料 4-1-7：共通教育に関するアンケート結果：P44

資料 4-1-8：現役正規採用教員に関する勤務先同僚及び本人への聞き取り調査：P45

資料 4-1-9：企業から見た卒業生の評価：P45

資料 4-2-1：学部卒業生の達成度認識と満足度：P46

分析項目 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 5-1 卒業後の進路の状況

(観点到る状況)

学校教育課程では大学院等への進学率は15.6%から22.9%，進学者を除く教員就職者（非常勤を含む）の比率は57.5%から64.2%，一般企業・公務員等への就職率は27.2%から36.8%の間を推移している。また、大学院への進学者も修了後には教職に就くことを希望しており、全体の7～8割程度の卒業生が教職を志していることになる【資料5-1-1】。



資料 5-1-1 教育地域科学部卒業生進路状況

年度	進路 課程	卒業 者 数	進 学 者 数	専 門 学 校 等 数	就 職 者 数	未 定 者 数	就職者内訳										卒 業 進 路 に 対 す る 率	適用
							企業					施 設 団 体	教 員	公 務 員	そ の 他 ・ 帰 国	その他		
							製 造 業	卸 ・ 小 売 業	金 融 ・ 保 険 業	情 報 開 連 業	そ の 他							
平成16年度	学校教育課程	109	19	3	82	5	5	3	2	4	7	1	50 (34)	10 (6)		95.4%	平成17年9月30日現在 卒業生には9月卒業者 1名を含む。教員及び 公務員の( )書き の数は非常勤で内数	
	地域文化課程	28	3	2	18	5	2	6	1	1	6	1			1	82.1%		
	地域社会課程	33	1	6	24	2	2	8	2	2	4	2		4 (1)		93.9%		
	合 計	170	23	11	124	12	9	17	5	7	17	4	50 (34)	14 (7)	1	92.9%		
平成17年度	学校教育課程	109	24	1	82	2	1	9	4	2	10	2	51 (39)		3	98.2%	平成18年7月4日現在 卒業生には平成17年 9月学校教育課程卒業 者1名を含む。教員及 び公務員の( )書き の数は非常勤で内数	
	地域文化課程	39	3	1	33	2	4	13	5	2	6	1		2		94.9%		
	地域社会課程	30	1		25	4	1	11	4	5		3		1		86.7%		
	情報社会文化課程	1			1	0				1						100.0%		
合 計	179	28	2	141	8	6	33	13	10	16	6	51 (39)	3	3	95.5%			
平成18年度	学校教育課程	109	16	1	87	5	1	8	1	3	6	7	57 (45)	4		95.4%	平成19年7月1日現在 卒業生には平成18年 9月地域文化課程卒業 者1名を含む。教員及 び公務員の( )書き の数は非常勤で内数	
	地域文化課程	31	4		25	2	3	5	5		6	3		3		93.5%		
	地域社会課程	29	1	1	26	1	8	1	5	3	4	2		3		96.6%		
	合 計	169	21	2	138	8	12	14	11	6	16	12	57 (45)	10	0	95.3%		
平成19年度	学校教育課程	100	19		74	3	2	4	1		10	2	52 (39)	3	4	96.9%	平成20年4月1日現在 卒業生には平成19年9 月卒業生3名、地域社 会課程1名、学校教育 課程2名を含む。教 員及び公務員の( ) 書きの数は非常勤で内 数	
	地域文化課程	28	2		26		4	1	8		11			2		100.0%		
	地域社会課程	30	1		27		2	3	6	1	8	1		6	2	100.0%		
	合 計	158	22	0	127	3	8	8	15	1	29	3	52 (39)	11	6	98.0%		

(外部評価のための資料,平成19年)

学校教育課程の卒業生(既卒者を含む)が福井県公立学校の正規教員採用者に占める割合は,平成19年度では30.4%であったが,平成20年度の採用予定では33.7%と回復傾向を示している。福井県公立学校の正規教員採用者数は,平成16年度以降,毎年度10名以上ずつ減少してきているが,福井県出身者が9割程度を占める当該課程の学生の多くは,県内において教員となることを志望している。なお,毎年1から4名は県外の教員として採用されている【資料5-1-2】。また,毎年1から5名が県内外の幼稚園教諭に採用されている【資料5-1-3:P50】。

学校教育課程の卒業生のうち,教員を志望して非常勤講師に就く者の割合は,68%から78.9%の間を推移しており,そのほとんどは福井県公立学校で採用されている。県の正規教員採用数が一方で毎年度減少するなか,非常勤講師への依存度は近年高まり,不自然な形態ではあるが,当該課程の卒業生は県の公教育を支える不可欠な担い手となっている【資料5-1-1】。

資料 5-1-2 福井県公立学校正規教員採用状況(平成15~20年度)

採用年度	福井県全体 (A)人	福井大学出身者			福井大学出身者 の採用率 (B)/(A) %
		(B)人	内 訳		
			新卒者	既卒者	
平成15年度	152	65	13	52	42.8%
平成16年度	147	62	9	53	42.2%
平成17年度	132	46	10	36	34.8%
平成18年度	118	37	9	28	31.4%
平成19年度	102	31	5	26	30.4%
平成20年度	92	31	4	27	33.7%

新卒者については前年度の卒業者を示す。平成20年度新卒採用者は平成19年度卒業生である。

(就職委員会資料)

資料 5-1-3 教育地域科学部卒業生の県外教諭及び幼稚園教諭就職データ  
幼稚園教諭として採用された新卒者

卒業年度	課程名	コース名	就職先	出身地	就職地
平成15年度	学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	名古屋市東桜幼稚園	岐阜	福井
	学校教育課程	教育実践科学コース	福井市エンゼル幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	教育実践科学コース	私立 さみ幼稚園	福井	福井
平成16年度	学校教育課程	理数教育コース	私立藤島幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	生活科学教育コース	南条幼稚園	福井	福井
平成17年度	学校教育課程	生活科学教育コース	丸岡栄光学園 緑幼稚園(私立)	福井	福井
平成18年度	学校教育課程	理数教育コース	私立藤島幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	生活科学教育コース	私立エンゼル幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	教育実践科学コース	上田学園 高坂幼稚園(私立)	福井	愛知
	学校教育課程	言語教育コース	私立梅園幼稚園	福井	福井
平成19年度	学校教育課程	生活科学教育コース	私立梅園幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	言語教育コース	私立栄冠幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	言語教育コース	私立藤島幼稚園	福井	福井
	学校教育課程	理数教育コース	福井加茂学園 暁幼稚園(私立)	福井	福井
	学校教育課程	生活科学教育コース	隆松学園 小鳩幼稚園(私立)	福井	福井
学校教育課程	臨床教育科学コース	私立青山よさみ幼稚園	三重	三重	

県外で正規教員として採用された新卒者

卒業年度	課程名	コース名	就職先	出身地	就職地
平成15年度	学校教育課程	障害児教育コース	愛知県公立小学校	愛知	愛知
	学校教育課程	言語教育コース	東京都公立高等学校	福井	東京
平成16年度	学校教育課程	生活科学教育コース	伊東市立南中学校	静岡	静岡
	学校教育課程	教育実践科学コース	静岡県富士宮市立貴船小学校	静岡	静岡
	学校教育課程	障害児教育コース	千葉県立千葉豊学校	福岡	千葉
	学校教育課程	障害児教育コース	名古屋市公立養護学校	福井	愛知
平成17年度	学校教育課程	社会系教育コース	豊田市立野見小学校	福井	愛知
	学校教育課程	教育実践科学コース	豊田市立花山小学校	福井	愛知
平成18年度	学校教育課程	芸術・保健体育教育コース	京丹後市立峰山小学校	京都	京都
平成19年度	学校教育課程	社会系教育コース	愛知県公立学校	福井	愛知
	学校教育課程	臨床教育科学コース	横浜市公立学校	福井	神奈川
	学校教育課程	障害児教育コース	横浜市公立学校	福井	神奈川
	学校教育課程	障害児教育コース	愛知県小学校	福井	愛知

(就職委員会資料)

地域2課程では、大学院等への進学率は5.2%から19.7%、大学院等への進学者を除く全体の就職率は83.7%から96.4%であり、そのうち公務員(非常勤を含む)は4.6%から14.5%、一般企業等が75.5%から86.2%の間を推移している。採用先企業は、製造業、流通業、金融業など多岐にわたり、両課程の特色に応じた専門職あるいは事務職として採用されている【資料 5-1-1: P49】。また、年度によっては県外への就職者も多くみられる【資料 5-1-4】。県内採用先のアンケートによれば卒業生に対する評価も高く【資料 4-1-9: P45】、これらの結果は、インターンシップ制度の積極的活用を通じた職業意識の喚起、就職支援室と就職委員会の連携による学生の進路相談体制の確立、就職ガイダンスや企業説明会等を充実させた成果である【資料 5-1-5: P51】。

資料 5-1-4 課程別県内・県外の就職状況推移

課程	卒業年度							
	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外
学校教育課程	71	3	69	9	68	12	68	16
	95.9%	4.1%	88.5%	11.5%	85.0%	15.0%	81.0%	19.0%
地域文化課程	13	8	15	3	17	15	12	13
	61.9%	38.1%	83.3%	16.7%	53.1%	46.9%	48.0%	52.0%
地域社会課程	18	5	20	4	16	9	19	7
	78.3%	21.7%	83.3%	16.7%	64.0%	36.0%	73.1%	26.9%

(外部評価のための資料,平成19年)

資料 5-1-5 就職支援に関する活動状況（平成 19 年度）

	日	場所	支援事業の名称等	テーマ&概要等	備考
4月	3～末日		就職情報提供の希望調査	就職情報提供の希望調査表提出	新3年・院1年
	20(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職(教職)ガイダンス</b> -大阪府教育委員会教員等説明会-	大阪市の教員の現状及び 採用に関する手続き事項の説明	4年・院2年 及び
	20(金)	教育1号館	<b>公務員講座募集ガイダンス(福大生協)</b> <b>公務員講座募集ガイダンス(福大生協)</b>	<b>公務員試験対策学内講座説明会</b> <b>公務員試験対策学内講座説明会</b>	希望者
5月	9(水)	教育1号館	<b>福井県インターンシップ制度事前説明会</b>	・講演「企業が求める人材」 ・「福井県インターンシップ制度」説明	希望者
	11(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職(教職)ガイダンス</b> -福井県教員採用試験説明会- -京都市教育委員会教員採用説明会-	・講演「教員採用試験に向けての心構え」 ・教員採用志願書作成の留意事項	4年・院2年 及び 教員希望者
	21～25	掲示	教員採用試験模擬面接 (教育地域科学部就職委員・本学)		教員希望者
	24(木)	掲示	平成20年度福井県公立学校教員 採用志願者選考試験実施要項公表	・福井県教員採用志願書受付期間(6/8) ・就職支援室での志願書提出期限(6/5)	4年・院2年 及び
	29(火)	教育1号館 13講義室	教員採用模擬試験(有料) (福大生協)	・教養、専門、論作文 各2000円 ・専門は申し込み時に17科目から選択	教員希望者
	1(金)	教育1号館 21講義室	公務員試験対策講座(有料) (福大生協)	・教養、専門併せて13科目 ・全240コマ(一般行政職ほか対応)	公務員希望者
6月	上旬		福井県インターンシップ制度	エントリーシートの送付	希望者
	22(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> -これからの就職活動- (毎日コミ・ディスコ・人材情報センター)	・就職活動すべてのポイント教えます ・職務適正テスト ・見落としがちな就職活動の落とし穴	3年・院1年
	7(土)	福井県 自治会館	インターンシップ事前研修会	福井県インターンシップ参加申込者の 事前研究会	申込者
8月 9月		各企業等	インターンシップ実施		申込者
10月	19(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> -インターネット活用講座- (リクルート・福井県就職支援機構)	・インターネット等の活用法 ・就職活動の心得と県内企業の 雇用情勢について	3年・院1年
	26(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> -エントリーシート作成講座- (毎日コミ・アイバック)	・エントリーの仕方と エントリーシートの書き方まで ・福井大学求人票閲覧システムの活用法	3年・院1年
			福井県インターンシップ事業報告会		
11月	9(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> ・産業職業研究セミナー(講演会) ・職業適性テスト(無料) (福井県雇用能力開発機構)	各企業の人事担当者から、企業の求める 人材と採用試験等の説明を受ける ・職業適性テスト ・自己分析・自己適性の仕方	3年・院1年
	16(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職(教職)ガイダンス</b> -教員採用試験対策講座- (時事通信出版局)	・教職を目指す学生の心構え ・教員採用試験対策から採用のポイント	3年・院1年
12月	14(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> ・面接講座(日経ディスコ) ・SPI模擬試験(福大生協)	・企業訪問・面接の基本マナー ・面接のポイント ・SPI基礎能力測定・性格適性検査	3年・院1年
	24(月)	総合研究棟I 13階 大会議室	<b>企業説明会</b> -地域共同研究センター (参加企業60社)	各企業人事担当者から企業の求める 人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
1月	11(金)	教育1号館 大2講義室	<b>就職ガイダンス</b> -就職活動体験報告会- (本学学生6名)	・本学先輩方の就職活動の流れ ・実践的な就職活動体験談	3年・院1年
	26(月)		就職講座 (福大生協)	・メディア活用講座 ・就職活動のためのメディア活用法	希望者
2月	7(木)	総合研究棟I 13階大会議室	<b>教育地域科学部 企業説明会・懇談会</b>	各企業人事担当者から企業の求める 人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
		掲示	教員採用対策 (福応会関係者・教育地域科学部就職委員)	教員採用模擬面接	教員希望者
	13～14 18～19	総合研究棟I 13階大会議室	<b>合同企業説明会</b>	各企業人事担当者から企業の求める 人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
3月	下旬	ハローワーク	就職懇談会	新規大学等卒業予定者との就職問題懇談会	

今年度より論文指導支援相談を始めます。

実施日時：5/25～7/27の各金曜日

場所：福井大学附属教育実践センター相談室

(外部評価のための資料，平成19年)

観点 5-2 関係者からの評価

( 観点に係る状況 )

平成 19 年度に行われた聞き取り調査の結果、卒業生からは特にライフパートナーや探求ネットワーク等の実践体験が学校現場で有効に機能しているとの高い評価を得た。また、同僚からも卒業生の大学時でのライフパートナー等の実践体験が高く評価され、卒業生がそれらの経験を活かして児童・生徒とのコミュニケーションをとることに努めている状況が示された【資料 4-1-8 : P45】。

地域 2 課程の卒業生を 2 名以上採用している福井県内の企業 10 社を対象に行われたアンケートによれば、採用された卒業生に離職者はなく、勤務先の上司からも高い評価を得ることができた。また、質問紙調査の結果からも、コミュニケーション能力、個性、勤務態度等に高い評価を得ることができた【資料 4-1-9 : P45】。

( 2 ) 分析項目の水準及びその判断理由

( 水準 )

期待される水準を上回る

( 判断理由 )

本学部卒業生の多くが教員として特に福井県内において採用されていることは、地域教育に携わる教員養成機関として関係者の期待に応えていて適切である<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 資料 5-1-2 : 福井県公立学校正規教員採用状況 : P49

学部卒業生の民間企業等への高い就職率は、関係者の期待に十分応えていて適切である<sup>2)</sup>。

<sup>2)</sup> 資料 5-1-1 : 教育地域科学部卒業生進路状況 : P49

卒業生の就職先から、本学部卒業生は、学校教育課程においては「実践的な力量形成」、地域 2 課程においては「地域で活躍する専門職養成」といった本学部の教育目的に対応した能力・資質を十分有していることが高く評価され、勤務態度も良好である状況が示された。これは、本学部の教育の成果や効果が十分にあげていることを示す証左である<sup>3)</sup>。

<sup>3)</sup> 資料 4-1-8 : 現役正規採用教員に関する勤務先同僚及び本人への聞き取り調査 : P45

資料 4-1-9 : 企業側から見た卒業生の評価 : P45

## 質の向上度の判断

事例1「教育内容、教育方法の改善に向けて取組む体制」(分析項目 )  
(質の向上があったと判断する取組)

平成14年4月、FD委員会要項を教授会決定し<sup>1)</sup>、以後、その下で毎年、FD研究会を実施してきた。法人化後は第3～6回が開催された<sup>2)</sup>が、質的転換点は第5回で、本学部のFD委員会がリーダーシップをとり、その時初めてFD研究会をFDフォーラムとして全学的に開催した。その結果全学規模でFD活動が取組めるようになり、他学部の活動経験を直接に学ぶ機会がもてることで、学部レベルでの独自の課題を他者との比較において明らかにしつつ、教育内容、教育方法の改善に向けて取組む体制が構築され、法人化前と比べ質は格段に向上した。しかもほぼ時を同じくして、FD活動及び授業改善の状況を教員個人評価に反映させる方式を導入したことは、上記のように構築された教育内容、教育方法の改善に向けて取組む体制を実質的に機能させる確かな保証となっている<sup>3)</sup>。

1) 資料1-2-2：FD委員会要項：P10

2) 資料1-2-3：FD活動状況と報告書：P11

3) 資料1-2-4：教育活動評価基準：P12

事例2「ライフパートナー」(分析項目 , , )  
(質の向上があったと判断する取組)

平成6年から始まったライフパートナーは、福井県内5市教育委員会と連携した不登校児・発達障害児の支援事業であり、教員養成における生徒指導・教育相談の実習機能を持った授業でもある。学生は実習を行う一方、授業の中で不登校・発達障害に関する講義やケースカンファレンスを受けている。この取組は「探求ネットワーク」などとともに平成15～18年度の特徴GPに採択され高い評価を得ている。法人化以降もこの活動を継続するとともに、平成16年度からは必修科目化することで、新たな展開を生み、事業は一層発展してきている。1つは、1学年約100名に加え継続して履修を希望する2学年約30名が、約210名の子どもたちと関わっていること。また、不登校児ばかりでなく発達障害児にも支援活動を拡大してきていること。さらには、相談室登校をしている生徒に対してインターネットを用いて授業を配信する活動を始めたが、その中心的役割は、教職科目を履修する工学部学生によって担われていること。以上の事例は、学校関係者や学生の期待に応え、以前から高く評価されている本事業を法人化後も継承・発展させていることを示している<sup>4)</sup>。

4) 資料1-2-6〔1〕：ライフパートナー活動報告書：P13

資料2-1-5：ライフパートナーと探求ネットワーク活動：P22

資料3-1-3：ライフパートナー授業計画と学校担当者の評価：P33

別添資料1-2：ライフパートナー事業の概要：P57

事例3「探求ネットワーク」(分析項目 , , )  
(質の向上があったと判断する取組)

探求ネットワークは、子どもたちの長期的な協働活動の展開を学生が支えるプロジェクトである。授業を通じて、ブロックごとの活動の企画が練られ、省察的な実践を展開し、それを実践記録にまとめ、年度末には、活動記録の報告と交流を他大学の学生代表の参加を得て行うラウンドテーブルを開催している。平成15～18年度特徴GPに採択され、ライフパートナーとともに実践的な教員養成カリキュラムの先駆的なモデルとして評価されている。法人化後も活動は発展し、参加者数は、法人化前年(平成15年)の370人より増え続け、平成19年度は470人(子ども275人、大学生195人)に達し、ブロック数も増えている。これらは、学生や地域の期待に応えて、活動が高い水準で発展してきてい

ることを示すものである<sup>5)</sup>。

<sup>5)</sup> 資料 3-1-4：探求ネットワークの組織とサイクル：P34

資料 3-2-1：探究ネットを通して学んだこと：P38

資料 3-2-2：探求ネットワークとは：P38

資料 4-1-8：現役正規採用教員に関する勤務先同僚及び本人への聞き取り調査：P45

別添資料 1 - 1

## 学部・研究科企画委員会を中心とした学部・大学院の充実に向けての取組み

## 学部・大学院の充実に向けての取組み

教育地域科学部(及び大学院教育学研究科)の将来構想や、現在の諸問題に対処するために設置されたいくつかの委員会の活動について以下に述べる。

## (1) 教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会

2004(H16)年4月の法人化は学内諸組織の体制と性格をそれまでとの対比において根本的に変えることになった。そうした流れに対応できるように、「人事、財政、企画等の観点から必要となる教育研究組織の改革について審議する」委員会として2004年6月11日に設置されることになったのが、教育地域科学部教育研究組織特別委員会(以下、特別委員会と略称)であった。特別委員会は精力的に活動し、翌2005(H17)年4月5日、教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会、同評価委員会、同研究・学外連携推進委員会、同カリキュラム委員会等の設置を実現させたことで役割を終え、みずから創出することになった教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会(以下、本委員会と呼ぶ)へ、「学部及び研究科の将来構想について検討する」教育地域科学部・教育学研究科構想検討委員会(2004.4~)と並んで吸収され消滅した。以後、教育地域科学部及び大学院教育学研究科の将来構想は本委員会を軸に展開していくことになる。

本委員会の構成は、学部長、学部選出の評議員3名、附属教育実践総合センター長、定組委員会委員長、学部教務学生委員会委員長、教授会選出の教員4名、以上以外に学部長が指名する学部の教員若干名で構成される。

その間、2004(H16).10.8教授会において学部長から、2004年9月22日開催の日本教育大学協会臨時会議で文科省から専門職大学院構想が検討されていることの説明があった旨の報告がなされ、今後は、特別委員会の中にワーキンググループを作って具体的な検討をおこないたいとの付言があった。そして早くも10月21日には専門職大学院等検討ワーキングが設置され活動し始めた。そうした中で、専門職大学院はそれのみ単独で設置されるというものではなく、残る既存の大学院や学部の再編・整備も条件であるということが明らかになってきた。そこで、本委員会の下に、専門職(教職)大学院設置を目指す方向で、その実現に必要な条件を整えるために2006(H18)年3月3日以来、タスクフォース小委員会と銘打って教職カリキュラム充実小委員会、教育学研究科問題小委員会、新課程改革小委員会、教育実践総合センター小委員会、教職大学院カリキュラム小委員会、教職大学院人事・組織等小委員会(前掲・専門職大学院等検討ワーキングを吸収)の6つの小委員会が置かれてエネルギーに作業を続けた。

2006(H18)年に中教審答申が公表されるに至って教職大学院に関するディテールもますます明らかになる中で、2007(H19)年に入るや、いよいよ概算要求をにらんで作業する段階へと移行することが求められた。すなわち、前のタスクフォース小委員会としての6小委員会を、やはり本委員会の下に今度は概算要求に係る組織として、学校教育課程改革小委員会、地域科学課程設置準備小委員会、教育学研究科改革小委員会、教職大学院設置準備小委員会という4つの小委員会に改組し、概算要求書作成の作業をすすめた。

その結果、本年6月文科省に、H20年開設を予定して教職開発専攻(教職大学院)設置の概算要求書を提出し、既設大学院の改革(学校教育専攻・教科教育専攻)及び学部教育の改革(地域科学課程)に関しては事前伺いの書類を提出し、いずれも受理された。あとの二者については、事前伺いの結果が既に出たが、設置計画の内容に修正が必要とされる意見は付せられなかった。

今それらの内容をかいつまんで説明しておきたい。

**教職開発専攻(教職大学院)の設置**

創設意図は高度職業人としての教員の養成であり、教職専門性開発コースとスクールリーダー研修コーディネーター養成コースの2コース(各定員15名)から成る。学校で、

学校の抱える課題を同僚教師と協働して具体的に解決する大学院。実践を省察・再構成し、世代サイクルを実現する大学院。学校間を超えて実践を評価できる大学院を目指す。コンセプトは、21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て、子どもたちの生活と成長を支える、教師の実践力・組織力形成のために、学校拠点に教師の協働実践力を培う、である。

#### 既設大学院の改革

21世紀の知識基盤社会に生きる力を培う学校教育をいかに実現していくか。こうした力を培うために学校改革と教師教育改革が求められている。それに応えるために既存の学校教育専攻と教科教育専攻について新しい教育課程を編成する。すなわち、学校教育を根本から問いそして支えるために、人間形成とそれを支えるコミュニティー(地域・社会・家族と学校)に関わる協働実践研究をコアとするのが新・学校教育専攻(定員12名)であり、PISAのリテラシーに象徴されるような実践的探究的な学力を実現するカリキュラムの開発研究をコアとするのが新・教科教育専攻(定員25名)である。

#### 学部教育の改革

現在の地域文化課程(定員30名)及び地域社会課程(定員30名)を新たに「地域科学課程」(定員60名)として統合し、21世紀に求められる地方分権と市民協働社会の実現に資する担い手を養成することを課程設置の目的とする。具体的には、地域社会に求められている文化振興、福祉・健康づくり、国際化、行政サービスのあり方、環境問題など諸問題を学び、実践的な問題解決能力を身につけた学生を育てる課程として再編成する。これまでのコース制での利点を生かしつつ、学生の授業評価が高い地域実践科目を核にした「ワークショップ型」の授業を新設し、学生の進路決定を支援する教育機能を強化する。

なお、学校教育課程では、教職課程の履修全体を通じて身に付けるべき資質能力を育成し最終的に確認を行うための教職実践演習科目の導入に向けて、全面的なカリキュラム改正に取り組んでいる。実習的科目を3つの系列に分け(授業づくりの実習・生徒指導教育相談の実習・組織学習の実習)、それぞれを実施すると共に、福井大学教職スタンダードを制作し、評価活動を公表していく計画である。

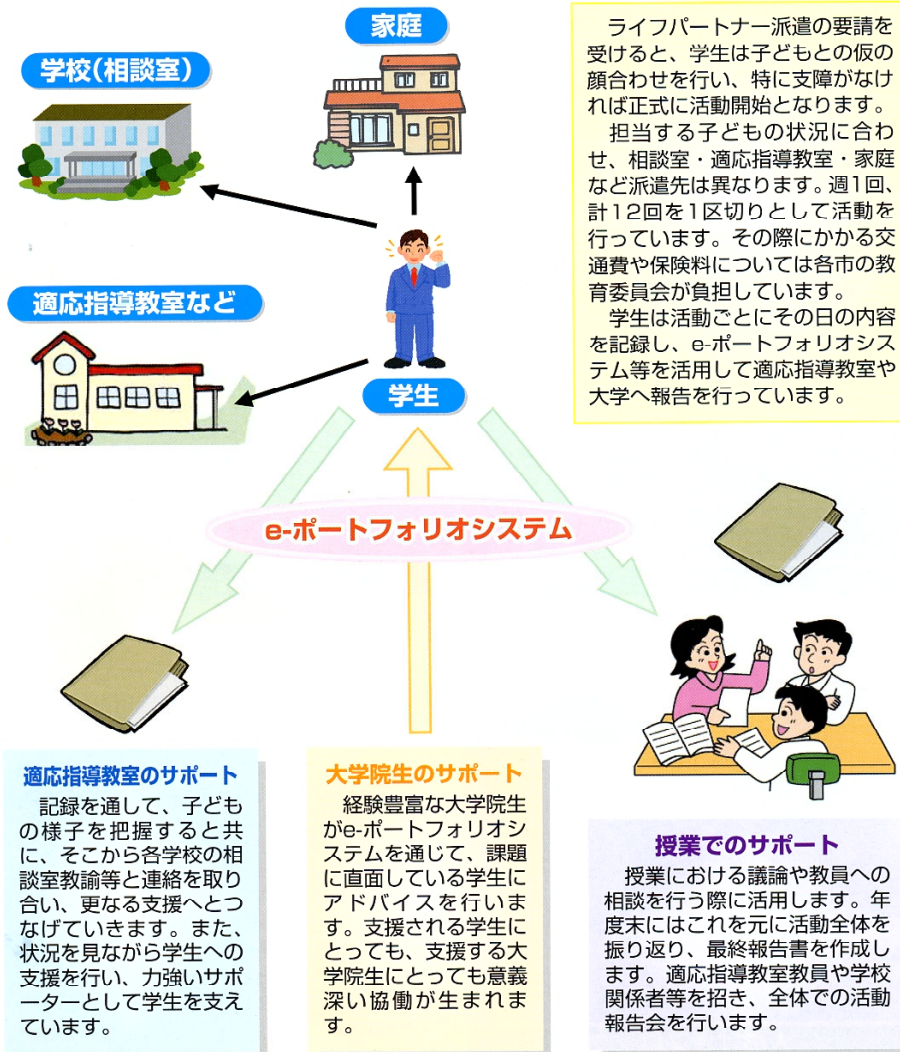
(外部評価のための資料。平成19年)



別添資料 1-2  
ライフパートナー事業の概要

## ライフパートナー事業 —不登校・不応児支援の実践—

各市教育委員会からの求めに応じて、学生は不登校児や軽度発達障害児の家庭・学校の相談室・学級・適応指導教室に出かけます。そこでの活動内容をe-ポートフォリオを用いて、教育委員会や担任教諭に伝えていきます。一方、大学の授業「学校教育相談研究」に参加し、不登校や軽度発達障害に関する講義を受けると共に、定期的にケースカンファレンスで自分の実践内容を報告し、他の参加者から意見をもらい、次回からの実践を検討していきます。大学の授業には教育委員会の担当者等も参加し、学生にアドバイスを行います。



(平成15年度G P「地域と協働する実践的教員養成プロジェクト実施報告書,平成19年3月)」

探求ネットワークの概要

探求ネットワークとは

探求ネットワーク（以下、探求と記述）は、文部科学省の行っているフレンドシップ事業の一環として、教師を目指す福井大学教育地域科学部の学生が中心となって取り組んでいる実践事業の一つである。1995年度から開始し、今年度で12年目を迎えた（注：2006年度時点）。主に市内の小学4年生から中学生の子どもたちを対象に年度の始めに募集をかけ、そこで集まったメンバーで5月から12月までの8ヶ月間継続して活動していく。継続して活動していくことによって、学生だけではなく、子どもたちと共に活動を創るということを目指している。また、探求では1年を区切りとしているが、子どもたちも学生も2年3年と継続することでさらに見通しを持って活動したり、活動を発展させたりすることも目指している。

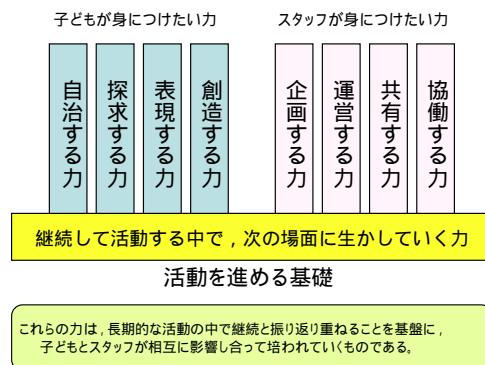
活動は基本的に毎月第2・4土曜日の午前中に行っている。料理や気球など、魅力あるテーマにそってブロック分けをし、子どもたちは1年間、特定のブロックに所属して活動していく。ブロックは、設立当初から子どもたちの興味を持つものを考え、さまざまな変化をとげてきた。そして今年度はその流れを汲み、9つのブロックを設け、活動を行ってきたのだ。また、探求に参加する人数の規模も拡大し、今年度、探求全体では子ども250名、スタッフ180名という規模で活動を行ってきたのである。

探求ネットワークのねらいについて

探求が子どもやスタッフに対してねらっているものは、探求発足当初からこれまでの活動を通して、一貫したものだと言える。

まずそういったねらいを説明する上で、探求発足の背景を説明しなければならないだろう。発足の背景として、学校週5日制の導入や教員養成系の学部での実践的な場が保障されていないということがあった。その背景を踏まえて始まった探求では、子どもたちに対しては、学校週5日制で休みになった土曜日を利用して、子どもたち自身が様々な経験をし、活動に参加して行く中で4つの力の育成をねらっている。1つめはものごとを突き詰めるために探求する力、2つめは多くの人に伝えるために表現する力、3つめは時間や技を基にして創って行く力、最後に、子どもたち同士で互いに調整しあって運営していくための自治の力である。子どもたちに対してはこれら4つの力の育成をねらっているのである。

スタッフに対しては、実践的な場を保障し、子どもたちと関わって行く機会の中で、4つの力の養成をねらっている。1つめは、子どもたちがねらいとしている力を身につけるための活動を築き上げる活動を企画していく力、2つめは年間の計画の流れを見通して、活動を運営していく力、3つめは、スタッフ同士のつながりを強め、共に問題解決を目指そうとする協働する力。最後にスタッフ自身が他のブロックを知り、互いに高めあっていくための活動を共有する力である。スタッフに対しては、これらの4つの力の養成をねらいにしているのである。



教職開発専攻（教職大学院）設置構想

## 教職開発専攻(教職大学院)設置の目的

変化の激しい21世紀の社会を生きる子どもたちが、よりよく自己実現するために、学校には多くのことが求められています。家庭、地域、学校の連携で地域の教育力を高める必要があります。とりわけ学校においては、教員の専門的力量的の向上と協働研究が重要になります。そのために福井大学は、21世紀の学校教育を担う教員の専門的力量的の開発を目的として、教職大学院を開設します。

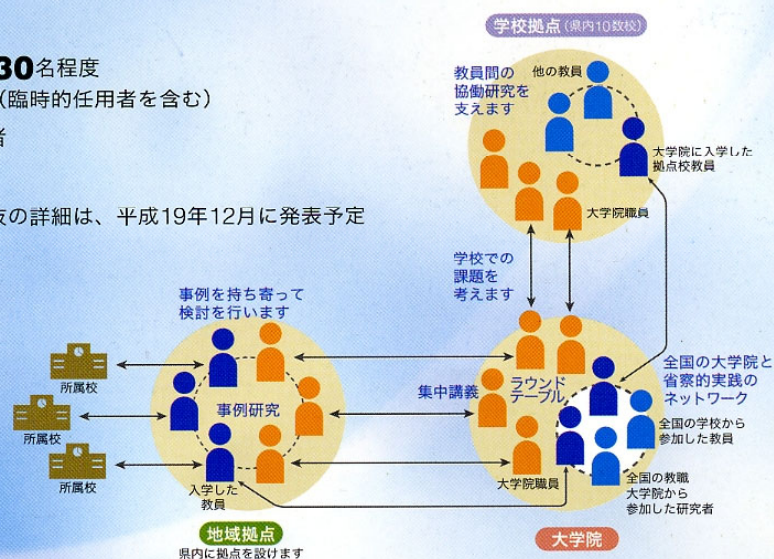


5つの特徴

1. 今日的課題に焦点を当てた協働研究を支援します。
2. 15人の大学教員がチームでバックアップします。
3. 大学教員は幼・小・中・高・特別支援の学校現場へ出向きます。
4. 学校行事等に配慮した集中的な講座を開設します。
5. 全国の教職大学院や優れた実践とつながります。

## 教育課程の概要

- 学位 …………… 教職修士（専門職）  
※新しい学位の授与
- 修業年限 …………… 原則として2年（1年を許可する場合もある）
- 必要修得単位 …… 長期インターンシップ  
共通科目、コース別選択科目  
計45単位以上を取得すること
- 募集人員 …………… 入学定員 **30**名程度  
現職教員（臨時的任用者を含む）  
学部進学者
- 詳細 …………… 入学者選抜の詳細は、平成19年12月に発表予定



(次頁に続く)

## 教育課程の特色

### ■ 学校拠点の協働実践研究プロジェクト

学校を拠点とし、学校が抱える課題に教員と研究者が協働して実践的な学校改革に取り組みます。

### ■ 教職専門性の開発・発展を支援

「実践力」「マネジメント力」「省察・研究能力」「理念と責任」の4つの軸で教育課程を構造化するとともに、世代交流のサイクルを新たに創り出していきます。

### ■ 長期実践報告の作成

修士論文は課しませんが、長期実践報告の作成と発表を行います。

### ■ 1年間の長期インターンシップ

学校の1年間のサイクルを経験し、授業づくり・学級づくり・生徒指導等を総体として実践的に学びます。

### ■ 事例研究中心の共通科目

「教育課程の編成・実施」「教科等の実践的な指導法」「生徒指導・教育相談」「学級経営・学校経営」「学校と教師の在り方」の5領域について、実践的なカンファレンス・事例研究を中心に学びます。

### ■ コース別選択科目

「カリキュラム・授業改革」「成長・発達支援」「コミュニティとしての学校と教師の力量形成」の3つの系の中から1つを選択し、主題に沿って実践と研究を深めます。

## 教育課程の構成

教職専門性 開発コース	スクールリーダー 研修コーディネータ 養成コース*	学年履修単位（目安）	
		1年次	2年次
長期インターンシップ（10単位）		10単位	0単位
共通科目（20単位）		14単位	6単位
コース別選択科目（15単位）		2単位	13単位
合計（45単位）		26単位	19単位

\* 入学前に連携協力校等において共同研究の経験を有するなど一定の要件を満たす者は、短期履修（1年）でも修了可とします。

### ■ 授業科目例

#### 共通科目例

1. カリキュラムのデザインの実践事例研究（2単位）
2. 授業づくりの長期実践事例研究 I、II（計4単位）
3. 児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究 I、II（計4単位）
4. 学校協働組織マネジメント（2単位）
5. 教師の実践的力量的形成の課題と実践（2単位）

※ いずれの科目も  
3、4人の教員が  
チームで担当します。

#### コース別選択科目例

1. カリキュラム・授業改革マネジメント 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）
2. 児童生徒の成長・発達支援 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）
3. コミュニティとしての学校と教師の力量形成 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）

（教職開発専攻 教職大学院 パンフレット，平成 19 年）

別添資料 2-1

教育課程における実践的プロジェクト科目の位置づけ

実践的プロジェクト科目（教育実践研究，探求ネットワーク，ライフパートナー）と教職科目の対応

教職科目(平成19年度)

科目	必修 選択の別	小 科 目		単位	毎 週 時 間 数								年次 学期	
					1		2		3		4			
					前	後	前	後	前	後	前	後		
教育課程及び 指導法に関する 科目	教育課程の意 義及び編成の 方法・特別活 動の指導法	1系	2系	教育課程研究（特別活動の指導法を含む）	2		2							探求ネット ワーク
				総合学習研究（特別活動の指導法を含む）	2	2								
				学習過程研究（特別活動の指導法を含む）	2		2							
生徒指導・教育 相談及び進路 指導に関する 科目	生徒指導の理 論及び方法 学校相談の理 論及び方法・ 進路指導に理 論及び方法 生徒指導の理 論及び方法 学校相談の理 論及び方法・ 進路指導に理 論及び方法	1系	2系	学校教育相談研究	2			2					備考 継続して4 単位履修	ライフパ ートナー
				学校教育相談研究	2			2						
				生徒指導論	2			2						
				学校教育相談研究	2				2				備考 継続して4 単位履修	ライフパ ートナー
学校教育相談研究	2					2								
履修単位		4	4											
教育実践研究 （教育実習）		1系	2系	教育実践研究（介護等体験を含む）	1					2				教育実践 研究
				教育実践研究（教育実習事前学習）	2									
				教育実践研究 A（小学校主免教育実習）	4									
				教育実践研究 B（中学校主免教育実習）	4									
				教育実践研究（教育実習事後学習）	1						2			
				教育実践研究 A（小学校副免教育実習）	2									
				教育実践研究 B（中学校副免教育実習）	2									
				教育実践研究 A（幼稚園教育実習）	2									
				教育実践研究 B（障害児教育実習）	2									
履修単位		10	10											

教職科目(平成20年度)

科目	必修 選択の別	小 科 目		単位	毎 週 時 間 数								年次 学期	
					1		2		3		4			
					前	後	前	後	前	後	前	後		
教育課程及び 指導法に関する 科目	教育課程の意 義及び編成の 方法・特別活 動の指導法	1系	2系	教育課程研究（特別活動の指導法を含む）	2		2							探求ネット ワーク
				学習課程研究（教育実践研究B-）	2	2							備考 継続して4 単位履修	
				学習過程研究（教育実践研究B-）	2		2							
				学習過程研究（教育実践研究B-）	2			2					備考 継続して4 単位履修	
				学習過程研究（教育実践研究B-）	2				2					
履修単位		4	4											
生徒指導・教育 相談及び進路 指導に関する 科目	生徒指導の理 論及び方法 学校相談の理 論及び方法・ 進路指導に理 論及び方法 生徒指導の理 論及び方法 学校相談の理 論及び方法・ 進路指導に理 論及び方法	1系	2系	学校教育相談研究	2			2					備考 継続して4 単位履修	ライフパ ートナー
				学校教育相談研究	2			2						
				学校教育相談研究	2			2						
				学校教育相談研究	2				2	2			備考 継続して4 単位履修	ライフパ ートナー
学校教育相談研究	2													
履修単位		4	4											
教育実践研究 （教育実習）		1系	2系	教育実践研究A-（教職入門を含む）	1					2				教育実践 研究
				教育実践研究A-（介護等体験を含む）	2									
				教育実践研究A-（小学校主免教育実習）	4									
				教育実践研究A-（中学校主免教育実習）	4									
				教育実践研究A-（教育実習事後学習）	1									
				教育実践研究A-（小学校副免教育実習）	2									
				教育実践研究A-（中学校副免教育実習）	2									
				教育実践研究A-（幼稚園教育実習）	2									
履修単位		12	12											

は休業期間中に実施

（専門教育履修手引き，平成19年度・平成20年度）

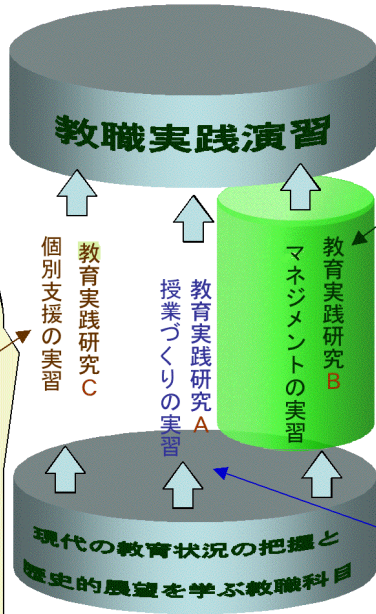
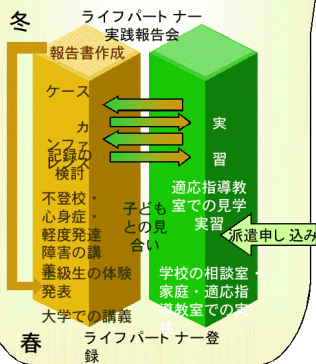
地域と協働して生徒指導・授業づくり・組織学習を体系的に行う教育実習の実施

教育実習だけでは実践と理論を架橋する教職指導はできない。3種類の教育実習を大学の講義と連動させ、かつ、4年間かけて行うカリキュラムを作成

- 教育実践研究A ⇒ 12 単位
- 教育実践研究B ⇒ 8 単位
- 教育実践研究C ⇒ 8 単位

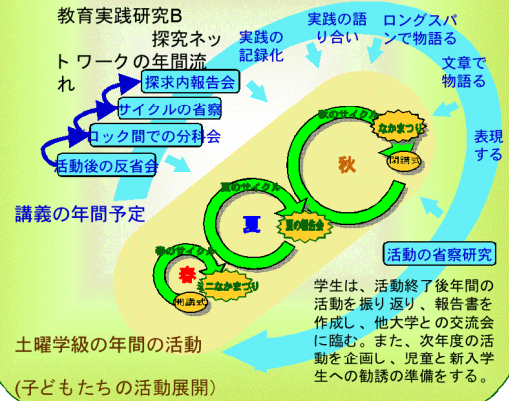
Aは1年生から4年生までのホーム制教育実習における学び世代サイクルを実現。Bは週5日制に対応した土曜日開講。Cは、市教育委員会との連携事業。講義と並行して実習が行なわれ、講義の中で実習のサポートが行なわれる。

生徒指導・教育相談及び進路指導の科目(8単位)を中心に、大学の講義と教育実習が連結し、かつ、教育委員会と連携した不登校や軽度発達個別の教育支援プロジェクト(ライフパートナー事業)

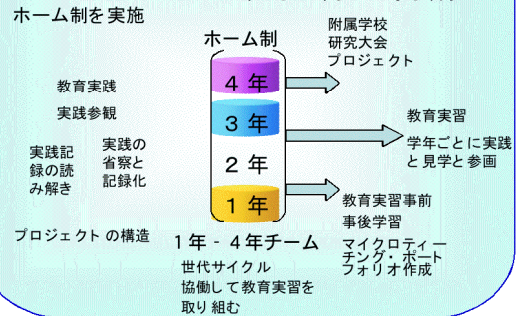


3種類の教育実習は、4年次に行なわれる教職実践演習の中で、教員としての使命感や責任感、対人関係、児童生徒理解、教科の指導力の視点から、福井スタンダードにもとづいて到達度評価と省察が行われる。

教育課程及び指導法に関する科目(8単位)を中心として、地域の子どもたち(土曜学校)に総合学習を援助し、その援助方法や組織学習について講義中で検討を行うプロジェクト(探求ネットワーク事業)



いわゆる教育実習を中核とする科目(12単位)を4年間継続的に積み上げていくプロジェクト



(基礎資料)